
銀魂 ~夜叉と陽の物語~

吉田小杉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 ～夜叉と陽の物語～

【Nコード】

N4719S

【作者名】

吉田小杉

【あらすじ】

銀時の前に突如現れた人物。それは昔彼らが慕い、憧れた、忘れられない人でした。その人の願いとは？
銀時の出す答えは？

1・再会？（前書き）

人生初投稿です。

よろしくお願いいたします。

1・再会？

「久しぶりだな銀時。」

頭の中にふとそんな優しい声が聞こえた。少し違和感を感じながらもこの天然パーマは、

「ん？誰だオイ人が食後の昼寝タイムを優雅に過ごしているときによお。」

この白髪天然パーマは無愛想にも程がある返答で優しい声にそう言い放った。

「相変わらずだね銀時。会えなくなっからもうどれくらい経ったかわからないけど、元気そうで何よりだよ。」

銀時は目を見開き、一瞬何が起きたかわからなくなった。だがその声の主は確実に知っている。昔あれほど憧れ慕った恩師の、もう一度だけでも聞きたいと心から願った人の優しい声だったのだから。

「先生……。」

「まだそう呼んでくれるんだね銀時。」

その人は少し苦い微笑を浮かべながら暖かい目を銀時に向けた。

「当たり前じゃねえか。松陽先生。」

銀時は内心驚いてはいたが、やはり嬉しかった。普段の銀時なら多少怪しむようなシチュエーションだが、（ツラの野郎に連絡してやるのかな）とか考えており、

「死んだはずじゃ？」とか、「ていうか夢じゃね？」とかは頭にも浮かばなかった。

「元気だったかい銀時？それに他の子達も。みんな仲良くやっているかい？」

嬉しそうに聞く先生の問いに銀時は何も答えられなかった。ツラとはまあ立場は違えど適当にくされ縁全開でやっている。まあ訳のわからない化け物生き物に夢中になっているが。

だが晋助は？

「まあぼちぼちやってますよ。」

銀時は苦笑いを浮かべながらそう答えた。

「ところで銀時。今日何で私は銀時の前に現れたと思っつ？」

「一番気にはなっていたところだ。まさか向こうから聞いてくるとは思わなかった。」

「いやいやわかんねっスよ。疲れて夢でも見てるんじゃないかねえかと勝手に思いはじめてますけど。」

「ははは。夢か。そうかもしれないね。」

松陽はにっこり笑いながらそう答えた。

「いやどっち！？何かすげえ感じで出てきて結局夢オチパターンで
すか！？」

銀時は若干焦りながらそう突っ込んだ。

「ははは。半分は冗談かな。まあまあ久しぶりなんだからいいじゃないか。」

先生は楽しそうにそう答えた。半分て何だよオイとか思いながら銀時は今日も天然パーマ全開の頭を掻いた。

「いやいや銀時。実はお願いがあるんだよ。」

先生は相変わらずにっこり笑いながらそう言った。

「お願い？先生が俺にですか？」
初めてのこともかもしれない。昔はお願いなんかしてきたことなんかなかった。それどころか俺達のわがままをいつも笑って聞いてくれた。

「そうなんだ。実は銀時、晋助に会いたいんだ。」

「晋助に？つてかそれ何で俺に？それは俺に言っても無理すよ。真撰組の変態ゴリラにでも頼んだほうがいいと思いますけど。」

銀時はやっぱり晋助か。と内心思いながら冗談まじりにそう答えた。

「変態ゴリラ？ははは。そうかもしれないけど私は真撰組にはちょっと頼み事はしたくないかもしれないなあ。」

それはそうだ。真撰組は一応幕府側の組織である。変態ゴリラや味覚がくさってるオタクなど、最近あまり威厳は感じられないが、一応幕府側であることは間違いない。

「すみません先生。」

銀時はハッと気がついて謝罪をした。普段から心がこもっていない軽口をよく叩いてはいるがこれは銀時らしからぬ軽口だった。

「いやいやいいんだよ。変態ゴリラっていうのもちょっと見てみた

「気がするしね。」

松陽は軽く笑いながらそう冗談っぽく答えた。

「いや、会わないほうがいいですよ。ストーカー属性までついていますから。本当終わってますからあのゴリラ。」

銀時は自分の不覚を忘れてしまいたいからか真撰組のトップをバカにした。

「でも何で晋助なんですか？まああいつがどこにいるか俺も知りませんけど」

「銀時は会いたくないかい晋助に？会ってちゃんと話をしたくはないかい？」

「あいつと話すことなんてねえですよ。もう昔とはちがいますし。」
銀時は珍しく声を少し荒げながらそう答えた。
もう話の出来ない位置まで充分きてしまっている。

「そうかい。わかった。じゃあ銀時、言い方を変えよう。」

あいつを止めてくれ。

1・再会？（後書き）

ありがとうございました。

駄文、くそ話、色々不満はあるでしょうが、ご了承くださいまし。

2・夢のまた夢。(前書き)

2話目です。読んでる人いるんですかね？笑

引き続き駄文よろしくお願いします！

2・夢のまた夢。

「うん？」

銀時は気がつけば、万事屋のソファアに横たわっていた。ゆっくりと目を開け、しばらくぼーっとする。死ぬほどダルそうな顔をしながら銀時はようやく起き上がった。

「やっぱり夢オチパターンか。そらそーだよな。」

死ぬほどダルそうな顔で銀時はボソツと呟いた。
まあ確かに死んだと思って何年もしてからいきなり現れたらそう思うのが普通である。

「まあ…、でも久しぶりだったな声を聞いたのは。けっ。早く起きすぎたかな。」

天然パーマの頭を掻きながら少し笑みを浮かべた。
夢だろうと何だろうと懐かしかった。そして話が出来たのが嬉しかった。

「でもあの願いは聞けねーな。先生。どうにもならねーことがあるって。いう事は一番よく知ってるでしょ？」

ひとり言なのか、まだ夢の続きを見ようとしているのか銀時はまだしゃべり続けていた。

「あつ銀ちゃん起きたアルか？」

この万事屋に少し前から住み着いてる娘、神楽。外見は可愛いらしいまだ幼さの残る娘だが、正体は全宇宙に名を轟かせる最強の戦闘一族、「夜兎」の血をわりとガッツリ受け継ぐ女の子である。何故かなりゆきで万事屋の従業員として住み込みで働いている。給料は出ていないが。

「1人で何ブツブツ言ってるアルか？気持ち悪い男になったもんアルな。」

起きたばかりであんまり頭が働いていないのに気遣いのかけらもない言葉をかけられ、何かイヤな気分がしてきた。

「うるせーチャイナ。お前に起きた瞬間からこれ程の哀愁漂わせれんのかこの小娘が。」

銀時は気だるさ全開でそう言い放った。別に哀愁なんかどこにも漂ってはいない。

「神楽、新八は今日来てねえのか？」

そついやあのメガネはどこいった？ていうか朝いたっけ？とか思いながら神楽に尋ねる。

「いるアルよ。オイ駄メガネー！銀ちゃん起きたアルヨー！」

しかし馬鹿にされやすい男だな。としみじみ思いながら新八が部屋にはいつてきた。

「誰が駄メガネじゃー！なめとんのかこらあ！」

志村新八。^{メガネ}万事屋で働くもう1人の従業員。成り行きでなぜかうちで働くようになった。最初は姉と道場の再興がどーとか言っていたが、姉が前述の変態ゴリラにストーカーに遭っているため再興が進んでいない。

「よーおはよー、ぱっつあん。渋いイチゴ牛乳でも入れてくれや。」

「酔昆布アル！」

「何言ってるんですか二人とも。銀さんやっと思きたんですか？もう夜ですよ。」

新人は仕事がないのはまあ仕方ないが、寝すぎだろ。と思いながら銀時に言う。

「あゝもうそんな時間かよ。いやいやなかなか有意義な1日だったかな。」

「朝帰りして寝て昼飯食って夜まで寝るっていう生活の何が有意義なんですか？くそですかあんたは？くそ二ートすかあんたは？」

「いいかいぱつつあんよ。大人にはな、メリハリつつうもんが大事になってくんだよ。よく働いて休む時はしっかり休む。これが一番ストレスを溜め込まない働き方なの。わかる？」

「わかるアルか？そんなんもわからないからいつまで経ってもメガネがとれないアル。」

「知らねーよ！成長したらメガネとれるとかあんのかよ！？つつかおっさん、人に働き方説いてるけどあんたもう1ヶ月ぐらいしっかり休んでるから！どこ探してもそんなにしっかり休みとるリーマンいねーよ！」

新八はなぜ自分がこれだけボロクソに言われているのか理解できなかったが、まあしつかり突っ込むのも仕事か。と思いつつながら声を張

り上げた。

「そんなことヨリ新八。さっきの手紙はいいアルか？」

神楽は新八イジリに飽きたのか、ふと思いついたように言った。

「手紙？オイオイ今春一発目のラブレターかよ。たまんねえなオイ。目でもそろそろキラめいちゃおかな。」

銀時は別に本心から思っではいけないのか、あまりダルそうな顔を変えることなくそう言った。

「いや銀さん、髪は長くて綺麗でしたけどあれは多分男の人ですよ。銀さんの事知ってる人なのかなあ？」

新八は少し前の記憶を元にそう言った。まあここ万事屋まで来て依頼を言わずに手紙だけ渡して帰っていく人はなかなかいないので忘れていたというわけではないが。

「ああ？何だそれソラじゃねえのか？」

銀時は、面倒くさそうにそう答えた。

「いや桂さんなら僕らも知ってますよ。」

そろそつだ。銀時は確かにそつだなと思いつつながら、

「じゃあ誰よ。」

悪いけど俺は男とは一晩たりともあやまちを犯した覚えはねえぞ。」

「いや僕らは知らない人ですね。何か話し方がすごく丁寧な人でしたね。年は銀さんより上だと思えますよ。」

そこまで新八が言うと銀時はハッと気づき先ほど夢で会った人物を思い出した。

「新八！その手紙よこせ！」

銀時は、早く見せると言わんばかりの勢いで新八に吠えた。

「はい！これです。さき言っときますけど僕ら見てませんからね！」

どうでもいいわ！と思いつながらその手紙の入った封筒を新八から急いで奪い、文面を見た。

銀時は一瞬目を見開き、驚愕した。

文章は短かく、一言だけだったが、その美しく丁寧な字はまさしく先生の字だった。

『小太郎のところに行ってください。』

小太郎？何でツラんところに。ってかあれは夢じゃなかったのか？よくわかんねーな。

銀時は頭を掻きながら声には出さなかったが、そう心の中で呟いた。

「オイ新八！神楽！この手紙渡しにきたやつ何か言っていなかったか？」

銀時は思い出したように二人に尋ねた。

「言っていましたよ。何か意味は全然わからなかったんですけど、確か、『お前達ならきつと出来ますよ。』っていうのを言っておいてください、って言われました。」

新八は別に記憶力が悪いという変なキャラクターが付いてるわけでもないので普通に答えた。

「アト、コレも意味がわからなかったアルけど、『銀時といつも一緒

にいてくれてありがとう』『って言ってたアルよ!』」

神楽は思い出したようにそうテンション高く答えた。思い出したのとお礼を言われたのがちょっと嬉しかったのだらうか。

銀時は、二人の返答を聞いて、昔慣れ親しんだ暖かいものを感じながらとりあえずツラのところを急いで向かう決心をした。

「ネエ銀ちゃん、一体あの人誰アルか?もしかして銀ちゃんの家族の人アルか?」

銀時は、それを聞いて少し考えてから、
「あゝそんな感じだ。家族みたいな感じだ。」と答えた。

家族になりたかった。家族になつたと思っていた。家族のように接してくれた。誰もいなかった、何もなかった俺に全てを与えてくれた。

（わかりましたよ先生。）

「新八、神楽。俺ちよつと出かけてくるからしばらく留守番頼まあ。

」

銀時は、そう言って玄關のほうに歩いていった。

2・夢のまた夢。(後書き)

ありがとうございました。

小説は読んでるほうが楽しいですね！笑

3 ・二人の夢、三人の夢（前書き）

三話目です。

誰も読んでないのでは？と頭に常によぎりながら書いています。

3・二人の夢、三人の夢

「銀ちゃん、何かすごい勢いで行ってしまったアルな！」

「一体誰だったんだろうね。あんなに銀さんが驚くなんて珍しくない？まあ悪い人ではなさそうだったけど。」

万事屋に残された二人は銀さんを見送ったあと、暇を持て余しながらそんな会話をしていた。

~~~~~一方、銀時は、桂に前教えてもらったアジトの前に来ている。

「おいヅラ開けるコラっ！早く開けねーと警察くん達にアジトばらしちゃうよ！イヤでしょ？だから早く開ける！」

銀時はデカイ声で叫びまくった。今このシーンを真撰組に見られると桂一派は一撃で崩壊するだろう。

「うるさいぞ銀時。それにヅラじゃない桂だ。今みんなで冬のソナタを見て…、いやっちがう！日本の夜明けについて熱く語り明かしていた所だ。何しにきたんだこんな夜中に。そ

うか銀時！ついに我々の仲間になる事にしたか！共に日本の夜明けを見よう！」

桂はマイペースに扉を開け、いきなり話をしだし、やけにテンションを上げて、くそつまらない事を玄関前で不機嫌そうにしている昔の仲間に話した。

「何が日本の夜明けだこのクソヅラが！こっちは今まで気持ちよく寝てたのにイヤイヤお前みたいなイカれた野郎の所に足運んでやってんだよ。」

銀時は心底うっとうしいという顔をしながらくされ縁の男に言い放

った。まあ別にこの男はどれだけボロクソ言ってもへこたれるような奴ではないが。

玄関前でさんざん言い合いをし、やっと桂のアジトの中にはいった。どうもこの男はいつも思うが、指名手配されているという自覚はあまりないように見える。まあ逃げ切れる自信があるからなのだろうが。

「で。銀時、話っているのは……」

桂がお茶をすすりながら話を進めようとする。銀時は何て言ったらいいんだ?とか頭の中で考えていた。

「『あいつを止めてくれ。』か？」

「なっ!?!」

銀時は驚愕した。先生に頼まれた台詞と同じ台詞を目の前の男が咳いたからである。

「…知ってたのかよ。」

「まあな。俺の所にも来たよ。」

先生との会話を思い出すようにしみじみと話す。さんな桂に銀時は、立ち上がって思いきり頭をはたいた。

「なっ何をする銀時!？」

「うるせークソヅラ! わかってんならさっきまでの玄関の下りは何なんだよコラ! 全然いらねーし、関係ねーじゃねかよ! どれだけ作者が携帯ポチポチ字いれるのに疲れてるか知ってんのか!？」

銀時はこの狂乱のクソ貴公子と呼ばれる男にド派手に突っ込んだ。

「うるさいぞ銀時。それにヅラじゃない桂だ。」

桂はまだお茶をすすりながら呑気にそう答えた。

「んでどーすんのよ？お前やんのか？？あまり簡単なことでもねーぞ。」

銀時はめんどくさそうに桂に尋ねた。確かにどこで何をしてるかもわからない奴を捕まえて止めさせるのは至難の技だ。

「どうするも何もやる以外に選択肢はないだろう？松陽先生の頼みだぞ？」

桂は自信満々に銀時に返答した。

「いや簡単に言うけど大丈夫なのかよ！？つーかお前はちゃんと話せたのか？俺も頼まれた覚えはあるんだが、夢うつつでどーもはつきりしてねーんだよ。んで手紙渡されてお前んとこいけって書いてあったから来たんだけどよ。」

銀時は今までの出来事を軽く整理して桂に事情を説明した。

「俺も実は冬のソナ…、同志と革命について熱く議論している時に不意に眠たくなった記憶はあるんだか。確かに先生にお願いされたぞ！」

「今完全にお前が日本の夜明けの議論なんかしてなくてひたすら冬ソナ見てたのは確定したけど、やっぱりオメーも夢うつつじゃねーか。」

銀時はまた冬ソナという単語を出した桂に苛立ちを覚えたが、話が進まないため軽く流し、本題に話を修正した。

「夢か夢じゃないかは関係ないだろ銀時よ。松陽先生だぞ？松陽先生が俺たちに晋助のことを願ったんだからやるしかないであろう？  
忘れたのか？松陽先生を守れなかったあの日を。」

「忘れたわけじゃない。今でも鮮明に覚えてるし、これからだって忘れることはできないだろう。」

「まあ……な。」

銀時は、いつも通り無表情だったが内心は苦い記憶を思い出していた。  
守れなかった。あの頃の俺に守る力なんかなかった。戦争が始まって、やれ攘夷だ幕府だと皆高らかに謳って刀を振るっていた。自分も白夜叉だ何だと周りから言われていた。だが結局守りたい人間を誰一人守れなかった。

「…銀時よ。確かに簡単ではない。だが良い機会ではないか？自分の戦いに決着をつける」

桂は銀時の目をスッと見つめ、そう問いかけた。

「シャレンなんねーぞ。しくじったらまたどんだけ人間が死ぬかわからねーぞ。」

銀時は予想していた。また戦争になることを。あいつはもう話してわかる奴ではない。昔みたいに時間がたてば仲直りの出来る口喧嘩ではすまない。次会った時はブツタ斬ると宣言している相手だ。

きっと大きな戦いになる。

仲間や江戸の人間が巻き込まれるかもしれない。

「そんな奴だからこそ俺たちで止めろって先生は言ってるんじゃないか？」

「はあ、しゃあねえな。」

銀時はため息をつきながら納得した。どうせいつかはこうなる運命だどこかでわかっていたのかもしれない。

「銀時。」

桂は真面目な顔して呼びかけた。

「何だよツラ？」

「戻れよ、夜叉に。」

明日からはじまる戦い。共に向かうは昔からの戦友、桂小太郎。共に倒すは昔の戦友、高杉晋助。

一人の恩師の下で同じ夢を見た三人が今、歴史を揺るがす戦いをはじめようとしていた。

### 3 ・二人の夢、三人の夢（後書き）

ありがとうございました。

話がしんどいですよね。オチどーしよ？

#### 4・真を背負う男たち（前書き）

真選組の話です。

総悟語はむずかしいですね！

#### 4・真を背負う男たち

江戸の治安を守り、反乱分子を即時処分する武装警察真選組。

変態、ゴリラ、ストーカーなど数々の汚名をその背に負っているが、隊士達からの信頼が厚く、組織のトップに立つ男、局長「近藤勲」、

ある事件をきっかけにオタクのレツテルを貼られ、信頼を失いかけたが、日々進化する組織の規律を厳しく仕切っている男、鬼の副長「土方十四郎」、

まだまだ年端のいかない少年だが、抜群の剣の才能とそのへんの女性なら一瞬で家畜に変えてしまうドS侍、一番隊隊長「沖田総悟」。

この三人を中心に真選組は日々活動しているのだが、

「おらぁ！田舎へ帰れ真選組！！」

「新聞見たぞこのクソヤロウども！！」

「何が武装警察だー！！」

真選組は今、危機的状況だった。

「どうしやす土方さん。住民は今回の一件でかなりお怒りのようです」

すぜい。  
「

「誰のせいだと思ってんだ総悟！！てめえがターミナルの一部をバズーカで吹き飛ばしたからだろうが！！」

「いやいや仕方なかったんですぜい。いつまでも女みたいに終わったことをグチグチ言ってるじゃねえヨ殺すぞ土方。」

「何だこのくそガキ！？よーしそこにジツとしてる。叩っ斬って  
楽にしてやるよ。」

江戸きつての対テロリスト特殊部隊真選組。悪人を捕らえ、町の治  
安を守るといふ重責を担っているわりに、やり過ぎという声や度重  
なる不祥事で住民からの信頼はすこぶる薄かった。

特に今回、総悟が攘夷浪士を捕まえる際にターミナルの一部を破壊  
してしまった件は、瞬く間に江戸中に知れ渡り、現在組の屯所は住  
民から集中放火を喰らっているというのが今の現状である。

「んで土方さんよ。近藤さんはどこですかい？」

事件の張本人の総悟は特に反省する素振りは見せず、土方に問いかけた。

「今、松平のとうつあんと近藤さんが幕府のえらいさんの所に謝りにいってる。もうじき帰ってくるころだ。」

土方ももう、自分の組織の（特に総悟の）不祥事には慣れたのか、冷静に答えた。

「帰ったぞー。トシー！総悟ー！どこだー？」

局長近藤勲は屯所に帰ってきて早々、土方と総悟を呼んだ。

「よおー！えらく早かったじゃねーか。こいつの切腹でも決定したか？」

土方は総悟に指を差しながらニヤニヤと笑い、近藤に尋ねた。

「いやいや土方さんよオ。部下の失敗は上司が責任をとるっていうのが、筋じゃねえですかい？だからさっさと腹切れ土方。」

「まあまあ二人とも座れ。今回の件は総悟だけの責任じゃないよ。」

近藤はそう言って二人を座らせた。二人はしぶしぶ座り、局長の説  
明を待った。

「結論からいうと真選組もちろん、総悟も不問になった。ただそ  
れにはひとつ条件がある。」

「条件？」

二人揃って口にだした。まさか不問になるとは思っていなかったのか二人とも少し驚いている様である。

「んでその条件てのは何なんだよ？」

土方はタバコをふかしながら近藤に尋ねた。あれだけの派手な不手際が不問になるっていうのはそれ相応の条件だろうと土方は踏んでいる。

「いやそれが詳しい事はよくわからんのだが、何でもターミナルが破壊された直後にそのどさくさに紛れて江戸に不法侵入してきた輩がいるらしいんだ。」

「っでそいつを捕まえてくれって事ですかイ？」

総悟の問いに近藤はうなずいた。

「それで何者なんだよそいつら？」

土方は新しいタバコに火をつけながら近藤に尋ねた。

「いやーそれが全くよくわからんのだ。天人なのか宇宙海賊のよう  
な輩なのか。」

「ただ一人、俺たちも知っている人間が紛れこんでいたんだ。」

「誰ですかイそいつは？」

総悟はあまり興味なさそうに近藤に尋ねた。とにかく来たやつをブツタ斬りやあ終いじゃねーかと考えていたのである。

「過激派攘夷浪士高杉晋助だ。」

「ほーあいつか。丁度いいじゃねえか俺らの天敵だ。最近見ねー  
と思っていたが、やっとお出ましかよ。」  
土方はニヤッと笑いながらそう答えた。

「だが妙だな。何で何者かわかんねーって幕府は言ってるんだ？高杉の野郎がいるってことは十中八九攘夷浪士じゃねーか。」  
土方は続けて近藤に尋ねた。確かに高杉は攘夷浪士を筆頭のようなものである。あいつを確認出来ているのに何故何者かよくわからないのだろうか？

「確かに高杉はいた。だが、浪士ではない者も大勢いたらしい。だから攘夷浪士グループとは断定していないそうだ。」

近藤は静かにそう答えた。

「んじゃそいつら一人残らず始末すりゃいいんですかい？」

総悟は軽くそう尋ねた。確かに総悟は剣を持たせば右に出る者はなかなかない。闘いだったら大して問題はないだろう。

「まあそうだが。向こうさん、ちょっと数が多いらしいんだ。」

近藤は不安げな顔をしながら二人に言った。

「へっおもしろー！百か二百か！？んなもん俺が一人残らず斬り殺してやるよ。」

土方はタバコを灰皿に押し付けニヤリと笑い近藤に言い返した。

「いや、何か三千ぐらいらるらじらよ。」

近藤はなぜか申し訳なさそうに答えた。近藤自身は別に悪いことは全くしていないのだが。この辺が隊士から慕われる理由の1つであろう。

「はあー！？何だよその数。何でそんな数の侵入者が入ってこれるんだよ。セキュリティとかねえのかターミナルには！？」

土方があまりの数の多さに驚きながら疑問をぶつけた。

「土方さん頭悪いですかい？だから今回の一件でそのセキュリティ

「イテーのが壊れたんでしょーよ。何でそれがわかんねーかね。」

沖田は土方を心の底からバカにしながらそう呟いた。その軽蔑しきった目の奥には楽しそうな笑みが見え隠れしていた。

「あっそうか悪い悪い、そういうことか。……ってそれ壊したのはだからてめえじゃねーか!! やっぱてめえのせいだろ! 何を人見下して楽しそうにしてんだこのガキ!」

「まあまあ落ち着け二人とも。そんなことより今は三千の侵入者をどうするかだ。」

近藤は再びヒートアップした二人を必死でなだめた。普段はまわりからはさんざん馬鹿にされているが、やはり一組織のトップとしての器量は持ち備えているようである。

「俺がやるぜい近藤さん。」

全量ぶった斬ってやりませう。というところで俺あちょっと出かけてくるぜい。」

そう言っつて総悟はそそくさと出て言った。

外にはブーイングを送り続けている住民たちがいることを忘れて  
いるのだろうか。まあ総悟のことだから心配することはないが。二人  
はそんなことを思いながら出ていく総悟をボーっと見ていた。

「んで。何なんだよ？この話の裏は。おかしいじゃねか。三千人に  
俺らだけで相手つてよ。普通こんな大事は腐れ幕府のお偉い方と向  
こうさんのトップで汚ねえ話し合いに持っていきこうとするじゃねえ  
か。」

土方は再びタバコを吸いながら近藤に尋ねた。

「やっぱり気づいてたかトシ。まあ総悟の奴も薄々気づいているとは思っがな。」

近藤は苦笑いを顔に浮かべながら話を続けた。

「多分俺達はその侵入者を一網打尽に捕らえることなんか幕府は望んじやないよ。」

近藤は悔しそうに呟やき、土方を見た。

「やっぱりそうだろうーな。」

……死んでこいって事か。まあいいが松平のとっつぁんは何て言うてたんだ？」

土方は全てを悟り、何もかも理解した。とっつぁんなんか別にどーでもいいのだが一応近藤さんと一緒に幕府にいったと聞いていたので尋ねてみた。

「『侍としての最後だ。景気よく死んで人生の飾り付けをしてこい』」

との事だ。」

「あのジジイらしいな。まあいいけどよ。んでっ？俺らはどーすりやいいんだ？」

土方は開き直って楽しそうに答えた。死など剣を身につけた瞬間からとくに覚悟はできている。今さら生き長らえたいとは思っていない。

「しばらくは待機だそうだ。敵が現れたら順次戦闘開始しろだよ。」

近藤も同じだ。剣と生き、剣の中で死ぬことに何の異論もない。ただ心配なのは隊士のことだ。自分は死んでもかまわない。ただ隊士には死んでほしくない。心優しいトップはそれが気がかりだった。

「なあトシ。もしあれだったら隊士と……」

「言ーなよ近藤さん。」

土方には近藤の考えはお見通しだった。自分よりも隊士の事。いつもそんな事ばかり考えている人だった。そんな人間がトップにいてくれたから皆、ついてきたのであろう。

「やっぱり局長はあんただな。」

土方は近藤には聞こえないぐらいの声で小さく呟いた。

「なあトシよ。俺たちは何か夢がなかったのかな？田舎侍集めてとつっあんに口聞いてもらって真選組をつくって。それをトシに大きくしてもらって。それ以外に何か成し遂げたことがあるのかな？」

近藤は自分達のやってきた事に何かしらの意味があったのかと考えたが、何も思い付かなかった。

「剣が振れるじゃねーか。」

土方は即答した。

「学も居場所もねえ、剣しか能のないゴロツキの俺たちを迎えてくれて。魔刀令で何もかも失った俺達を見捨てず、失くした剣を取り戻してくれた人は誰だよ？」

「……」

「俺達にとっちゃそれほど大きな夢はなかったよ。感謝してるぜ局長。」

「まあ隊士の奴らは俺から話しておく。まだそんなに時間がねえわけじゃねえだろう。」

土方は気持ちを切り替え近藤にそう言い、部屋から出ていくために立ち上がった。

「悪いなトシ。」

「何言ってるんだよ近藤さん。」

土方にはあまり似合わない優しい笑みを浮かべて部屋を離れた。しかし部屋から出た瞬間、鬼の形相に変貌したことは近藤は気づいていなかった。

「なめやがって腐れ幕府が。いいぜおもしれー。派手に暴れて江戸中、血の海に変えてやる。」

土方はタバコを吸いながらニヤリと不気味な笑みを浮かべ、屯所をあとにした。

真の文字を背負いし男たち。昔に皆で誓い合った「剣で世を変える」という夢は叶わなかったかもしれない。しかし、それぞれがそれぞれの想いを抱きながら真選組もまた戦の中に身を投じていく。



#### 4・真を背負う男たち（後書き）

ありがとうございました。

役者を揃えなければということとで急遽、真選組も登場させました。

話がなんか無駄に大きくなってきましたね。

逃げたいです。

## 5・夜の桜と春の雨（前書き）

考えながら書くってしんどいですねえ！

この二人の関係は原作でもまだ描かれていませんがまあそこはお許しください。

## 5・夜の桜と春の雨

いつからだ？あの人に夢でも会えなくなってしまったのは？

あの人がいなくなってから俺の世界は光の決して届かない闇夜に変わった。

戦争が終わるまでは、…あいつらと別々の道を歩みはじめるまでは、目を閉じて意識をなくすとあの人に会いに行くことができた。ただもう一度と望んだ優しい笑顔を見ることはできなかったが。

攘夷戦争が終わってどれくらい経ったのだろうか。逆賊の名を背負い、全てを捨て、歩み続けたこの道が決して正しくない道だとわかっていった。この道の先に光のあたる場所がないことにも。

だが俺は、俺から、…俺たちから先生を奪った幕府をやはり許すことはできなかつた。

これからどれだけ幕府を相手に喧嘩をし続けたとしても先生が戻ってはこない事はわかっている。ただ止まることも戻ることも出来ない。

「喧嘩か。…もうそんな次元じゃねえな。」

鬼兵隊総督高杉晋助。攘夷戦争時代から軍勢を率いて天人相手に修羅の道をただひたすら歩み続けた侍は舞い上がる桜をイメージさせるような美しい着物を身につけ、夜空を見上げ、口元に笑みを浮かべそう1人で呟いた。

「いや、夜空と煙管が絵になるねえ艦長。」

後ろからいつも笑顔を絶やさない、1人の青年が孤独を好む男に近づきながらからかった。

最強の戦闘種族、「夜兎」の神威。  
宇宙海賊春雨の、最強部隊、第七師団団長に若くして登り詰め、「  
春雨の雷槍」との異名をもつ男。  
今はひよんなことから1人の侍と行動を共にしている。

「どつしたの今日は？悪い夢でも見た？」

神威は変わらず笑顔のまま高杉に質問をした。

「いや、悪い夢ならもう醒めることはねえよ。」

高杉は自虐的な笑みを浮かべ神威にそう答えた。悪い夢ならもうあの日から見続けている。この夢から目覚めることはもうないだろう

「へえ」。でもまあ今回の事を済ましたら醒めるといいねえ。」

神威は一見優しくそう返した。いつも笑顔を絶やさない。人の命を奪い去る時も。

そんな奴だからこそ高杉は共に行動することを望んだのかももしれない。

「フッ。」

突然高杉は笑みを浮かべた。思いだし笑い、作り笑い、愛想笑い、そのどれにもあてはまらない不思議な笑みを。

「どうしたの急に？」

ニツコリと笑いながらそう神威は聞いた。

「いや、俺にそんな普通に物を聞いてくる奴は今じゃてめえだけだ  
などと思ってよ。別に偉くなつたつもりはさらさらねえが、どいつも  
俺にビビって顔色伺いするか、アホみたいに『尊敬してます!』み  
てえな面してるバカしか周りにはいねえからな。」

確かに。世間からみれば犯罪者には変わらないが、今も活動してい  
る攘夷浪士たちからすれば鬼兵隊高杉晋助は倒幕という狂気を身に  
纏つたカリスマ的存在と化している。そんな男に気安く接する人間  
などはもういなかった。

「まあそれは仕方ないよ。ははは。長いことトップに立つのも大変  
だね。」

神威は自分も春雨のほぼトップの位置に立っていたのだが、もう自分とは全く関係ありません。という感覚を覚えながらそう返した。

「へっ。柄でもねえ。」

高杉は何だそりゃ？とも言いたげな顔で笑みを作った。

「でも昔はいたでしょさすがに？生まれた時から総督じゃないんだし。」

普通の事を質問しているふりをして神威は少し高杉の中に眠っている心につっ込んでみた。

「何が言いてえんだてめえは。」

高杉は目に殺気を纏い、神威を睨みつけた。

「いや別にいい。まあそんなに気にしなくていいんじゃない？気にしてるかどうかは知らないけどね。」

「うるせえよ。」

高杉は身に纏っていた殺気を消し、ゆっくりと煙管に口をつけた。

…そういや昔はいたな。俺に対して気構えも心遣いもしない奴が二人ぐらい。毎日喧嘩して、次の日には忘れて、また言い争いになって先生に止められて。

暖かい光を浴びながらそんな日々を過ごしていたような記憶が自分の奥底に眠っていた。

そんな事を思い出し、夜空を見上げている男を神威は横からそつと見ていた。

(また何か思い出してるね。 ) そう神威は思った。でも何かを思い出しながら夜空をいつも見上げている高杉をそつと横から覗き見るのが嫌いじゃなかった。もっとも敵を鮮やかに斬り殺し、狂気を纏いながら命を摘んでいく姿を見るのも好きなのだ。

「さっ！明日は忙しくなりそうだからもう寝れば？」

神威はすつと背筋をのばし、先寝るよーと言って去っていった。

艦内に入っていった神威はこれからの事を考えていた。自分に流れる血からか常にギリギリの命のやり取りに飢えを感じていた。しかし自分の圧倒的な実力からどの星に行ってもその飢えを満たしてくれる奴には出会うことはなかった。鳳仙と一戦交えるために半ば気まぐれでついていったあの星に住む白き侍に出会うまでは。鳳仙を倒したあいつなら自分の願いが叶うかもしれない。

「でもあいつとやるって言ったら艦長怒るだろうしなア。」

神威はまあ仕方ないか。と一人で呟きながら眠りについた。

~~~~~

「よくわかんねー奴だな相変わらず。」

高杉は神威が去ったあと誰もいない後ろを向きながら一人呟き、また夜空を見上げた。

…どれだけ昔を振り返っても、辿ってきた道を振り返ってももう光の見える場所にはいない。

「銀時、ツラ。てめえらも当然出てくるんだろうな。」

高杉は一人になってもまだ夜空を眺めていた。戻りたいわけじゃない

い。また肩を並べて馬鹿騒ぎをしたいわけでもない。全てを無にし
てしまいたいだけだ。

「もう容赦しねえよ白夜叉。てめえは俺の敵だ。派手に暴れてやろ
うじゃねえか。」

そういつて高杉は艦内に戻っていった。
今から江戸を舞台に起こるかつかつてないほどの戦いを想像しながら修
羅と化した怪物は笑みを浮かべながら。

5 ・夜の桜と春の雨（後書き）

ありがとうございました。

どんな感じでしたかね？

何かあればよかったら感想お願いします。

6・最後に君を想います(前書き)

すみませんよくわからない内容になってしまいました。

無理やり押し込んだ感が出てますが最後まで読んでいただけたら幸いです。

6・最後に君を想います

「あ〜どうすっかなあ〜。面倒なことになっただぜ。」

もう何回ソファーの上でそんな事を言っただろうか。

銀時はあれから桂のアジトを後にし、万事屋にとぼとぼと帰っていた。帰りに飲みにもいこうかと考えたが、これから起こることを考えるととてもそんな気分にはなれなかったので帰ってすぐに眠りについた。

相変わらずのニート体質で目覚めたのは夕方を過ぎた頃だったが。それから特に何をする気も起きず、何か話したと思えばそんな文句のような事ばかり口にしていた。そうこうしながら気がつけば夜になっていた。

「あーもうイヤだ〜！定春ー！どこだ〜？何か銀さんモフモフした
くなってきたぞ〜。」

「定春ではない！桂だ！」

いきなり万事屋の扉がガラッと開き昨日も会ったよく見知った顔が
が現れた。

「てめーなんか呼んでねーよ！このクソヅラが！ー何しに来やがっ
たこのクソが！」

銀時は鬼のような形相でそう言い放った。何もやる気の起きないクソだるい時に最強に面倒くさい男が現れたのだ。まあ気持ちはわからなくもない。

「ツラじゃない。桂だ。いや銀時！そんな事はどつでもよい！テレビを見たか！？」

桂は珍しく焦りながら銀時に問い質した。

「うるせー！てめーの冬ソナのくだりはもうたくさんだよ！何だ！？俺にも見ろってか！？スカパーから始まってNHKを通じて成り上がったあの超人気ドラマを見ろって言いに来たのか！？あー！？」

銀時は大人気韓流ドラマの歴史を一通り踏まえながら突っ込んだ。

「ちがう！昨日最終回まで見たからもうよい。やはり真実の愛というものは存在するものだ！私は気がついた！…ちがう！そんなのどうでもいい！ニュースを見る！」

そう桂に言われしびしびテレビをつけ、ニュースを見ると割と綺麗目なアナウンサーが深刻な顔をしながら幕府要人の死亡を緊急報道として伝えていた。

「幕府要人が死亡？それがどうしたよ。…まさかてめえ。何だオイ

またえらい過激な行動にでたな！警察連れてってほしいかオイ？」

「俺じゃない！そんな事をするわけないだろう。」

「じゃあこれが何なんだよ。俺は公務員じゃねえんだから国のお偉いさんが死んでも驚かねーし生活に影響もでねーぞ。」

銀時はニュースの内容にまるつきり興味がなさそうに頭を掻きながら桂に尋ねた。

「…高杉だ。」

桂は静かにそう答えた。

「なっ！」

銀時は驚愕し、目を見開いた。このタイミングで何故あいつが？昨日の今日だぞ。

「いやいや何であいつってわかるんだよ？あいつ以外でもてめえみたいに攘夷浪士はたくさんいるだろーが。」

「高杉の奴、要人の死体の上にメッセージを置いてったのだ。」

「メッセージ？何だよ何でそんなのでめえが知ってんだよ。」

「ニュースを見る。今から読みあげるようだよ。」

桂はテレビに指を差し銀時に見るように促した。

『哀れな幕府へ宣言する。明日、俺たち鬼兵隊はこの国の全てを破壊し、無にする。これはほんの手始めだ。腕に覚えのある人間はかかってこい。利権をむさぼるしか能の無いカス共はせいぜい逃げてみる。まあ逃がすつもりはないがな。』

この国をパニックにするには充分すぎる内容だった。

「おいおい。随分熱のこもったラブレター書けるようになったじゃねえかあいつも。」

銀時は全くの他人事であるかのように無表情のまま桂に言った。

「どつする銀時？敵はおそらく大軍で攻めてくる。俺が掴んだ情報では宇宙海賊春雨も一緒らしい。」

（春雨？そうか多分あのヤローだな。嫌なコンビが出来ちまったもんだなおい。）

「一般住民の避難については既に俺の同志達に指示を出しているの

で心配ない。どうする？高杉を探すか？」

「いや、あいつはあんだけ派手な花火あげといてその近くでボーッとしているような馬鹿じゃねえよ。多分今頃船にのってプカプカ空に浮いてるだろーよ。」

「じゃあどうする！？このまま放っておくのか！？」

桂は銀時を急かすかのように詰め寄った。

「何を言っている銀時！外には高杉の仲間がいるかもしれんのだぞ！危険にもほどがある！」

桂は外に出ようとする銀時を制止しようとしたが、銀時はスツとよけて扉を開けた。そのまま出ていくのかと思えば桂のほうに振り返り、

「俺たちだって仲間だったんじゃないの？俺たちといた頃は仲間使っただけでそういうマネするような奴じゃなかったよなあ」

銀時はそう言って扉を閉めた。

何故か万事屋にて一人残されてしまった桂はフツと笑みを浮かべた。

「確かに。高杉はそんな奴ではなかったな。じゃあ俺も帰るとするか。」

軽い笑みを浮かべながらスツと立ち上がり万事屋を出ようとした時、

「ちょっと待つアル！」

桂はパツと振り向くとチャイナ服の娘とメガネが立っていた。

「全部聞かせてもらいましたよ。高杉さんが来るんですね？」

「それによちのバカ兄貴と一緒に！」

二人は桂に詰め寄った。

「まあニュースでも話題になっておったしな。でも二人は来ないほうがよいのではないだろうか？今度の戦いはかつてないほどに恐ろしいものになるやもしれぬ。」

「僕たちは三人で万事屋です!!」

「ソーアルヨ! ヅラニそひっこんどけばヨロシ。それに兄貴と…、
自分に流れる血に決着をつけたいアル。」

神楽は桂にそう言い、新八もその横でうんづん頷いている。

「まあ、俺は止めはせぬが。ただ問題は銀時の事だ。今まで見たことないようなあいつを見てしまいかもしれんぞ？その覚悟だけはしておいてほしい。」

桂は真剣に自分を見つめる二人はにそう言った。今も昔も外見はそれほど変わったわけではないが、やはり違う。攘夷戦争時代の銀時を、白夜叉となったあいつを見てしまうのはこの二人にとって、いいのだろうか？

桂は心の中で自問自答していた。腕はたつようだが、まだまだ子供。それに銀時を慕っている。

「僕たちは昔の銀さんを何も知らないんです。聞いてもいつもはぐらかされるし。でも知りたいんです！銀さんの事をもっと！それに

銀さんの力になりたい!!」

「そうアルヨ!隠し事はなしアル!」

二人は力強くそう答えた。

「わかった。ではもう何も言つまい。だが無理はするなよ。」

桂はニコツと笑ってため息をつきながらそう答えた。

「はい...」

「では明日に備えてもう休むといい。俺もそろそろ帰るとしよう。
銀時もどこかに出かけてしまったしな。もう一度言うが、無理はす
るなよ。銀時の為にもな。」

そう言って桂は万事屋を後にした。

(あいつも良い仲間をもったな。)

桂はさきほどのやりとりに喜びを感じずにはいらなかった。誰よ
りもつらい思いを抱えて、全てを一人で背負って生きてきて、そし
て全てを失った。もう仲間などは作ることはできないと思っていた。

桂は明日からの厳しい戦いに備えてゆっくり体を休めることに専念
することにした。

~~~~~

一方その頃、銀時は先ほど購入した酒を手に持ち、フラフラと夜道を歩いていった。

「おっ珍しいね。もう咲いてやがら。」

川沿いにある一本の桜の木。まだ満開の時期ではないが、時期尚早に花開いた桜の木を銀時はじっと見つめ、木の下にドカッと腰掛けた。

「全く何を考えてんだあのバカは。ド派手なことやらかしゃがって。」

銀時は咲き乱れる桜の花を見上げながら高杉のことを考えていた。

「相変わらず君たち三人は桜の華が似合っね。」

「…松陽先生。」

銀時は後ろを振り向き大して驚きもせず目の前に立っている人物の名前を言った。

「あれっ？もう驚かないんだね。」

「まあこのタイミングならおかしくないでしょ。つーかわかってたんですか？高杉が何かやらかすってこと。」

銀時はそう言って

「わかってはなかったけどね。そろそろ君の前に現れるんじゃないかと思ってたんだよ。」

銀時の問いに松陽はニコリと笑みを浮かべながらそう答えた。

「明日からあいつと喧嘩する予定ですけど、これでよかったですかね？」

銀時は真面目な顔で松陽の顔をじっと見た。高杉とのおそらく最後の戦い。恐らくどちらかが死ぬまで決着はつかないだろう。銀時は死ぬのはもちろん嫌だが、あいつを殺すのも良い気はしないので、気持の整理がつかないままだった。

「悲しいね。教え子が命を奪い合う争いをするのは。」

「そうならないように努力はしますけどね。」

「…頼むよ。まだ銀時にも晋助にもこっちは来てほしくないからね。」

そっすか。と小さく返事をして銀時はまた夜桜を見上げた。

「綺麗つすね。桜。一年ぶりに見ますけど。」

「ふふつ。一年ぶりか。まあそつだろつね。」

「俺、桜を見るとなぜかあいつを思い出すんですね。別にあいつは綺麗でも何でもないですけど。バカさ加減は満開ですけどね。」

「私もだよ。さっきも言ったように君たちは何故か桜がよく似合う。」

「そうですね。まあ、散らないように気つけますわ。」

「そうだね。君たちはまだまだまだ綺麗に花を咲かすことができる。生きてさえいればね。」

「……。安い酒でよかったらありますけど飲みますか？肴はこの桜しかないですけど。」

「充分すぎる肴だね。ありがとう。じゃあ少しいただこうかな。」

二人は会話を続けながらお互い手に持つ酒を口にした。

「初めてだね。共に酒を酌み交わすのは。」

「そうですね。酒にあまり良い思い出ないんで覚えてないですね。」

「出来ることなら四人で酒を飲んでみたかったんだけどね。」

松陽は風邪に吹かれて舞い散る桜の花びらを目で老いながらボソッと呟いた。

「…多分あいつも今頃、先生を思って飲んでますよ。俺らはいいつの事を考えて酒を飲んでる。これは一緒に飲んでるようなもんじゃないすかね。」

銀時は桜の向こうにある空を見上げながら松陽にそう答えた。同じ場所にはいないがお互いを想いながら酒を飲む。それで充分ではないだろうか？銀時は思った。

「そうか。そうだね。」

目の前に松陽先生がいる。夢のようで夢ではないような、不思議な感覚に教われながら、かつての恩師と酌み交わす酒は今まで飲んだ酒の中で一番の美味だった。

「ご馳走様。じゃ、僕はこのへんで失礼するよ。」

銀時、くねぐねも無茶はしてはいけないよ。」

松陽はスツと立ち上がり銀時にお礼と別れをいった。

「また会えますかね？」

名残惜しさを感じながらも引き留める気も何故か起きなかった。だから言った。もう一度会える日を夢に見て。

「会えるよ。必ず。皆でね。」

そう言って松陽は夜の闇に消えていった。

「聞いたか高杉？また皆で会えるってよ。」

銀時は夜に輝く桜を見つめながら高杉を想い、一人呟いた。

明日からはじまる戦いの前に銀時は高杉のことを想った。

嵐を前にして穏やかに流れる夜に一人たたずみながら。

「帰ろっ。さみい。」

6・最後に君を想います（後書き）

長々とだらだらとすみませんでした。

最後はむちゃくちゃでしたね。何を書きたいのか自分でもわかりませんでした。笑

またよろしくお願いいたします。

## 7・戦場に咲かす花（前書き）

仕事の合間をぬって書いてるので何か変な箇所があるかもしれません。ご了承ください。

## 7・戦場に咲かす花

戦争は轟音とともに幕を開けた。

鬼兵隊が仕掛けた爆弾によって町のいたる所が爆発、炎上。

その混乱に紛れて鬼兵隊と春雨の集団が一斉に空から下りてきて、次々と幕府関係者や逃げ遅れた住民を無残に斬り、命を奪っていった。

しかし絶望的な状況と圧倒的な戦力差の中でも決して心が折れない組織があった。

「住民の命が最優先でしょ！」

「いや、敵の殲滅を優先しちゃえばいんじゃないかね？でかめのバズーカ持ってきたから適当撃って吹っ飛ばそうよ。」

松平片栗虎と近藤局長が今さらそんなことを言い争いをして周りの隊士を困らせている中、戦場の最前線にたって次々と敵を斬り倒していく強者が二人。

「土方さん珍しく仕事してるじゃねえですかイ。いつもはえらそうにタバコふかしてるだけなのにねエ。」

「うるせー総悟！仕事してるかしてねーかをてめえだけには言われ  
たくねえよ！だいたいてめえ昨日どこいってやがった！？」

「それは死んでもあんたにや言えねえですぜイ。ほら、あぶねーぜ  
イ。」

総悟はそう言って、土方に斬りかかろうとした、鬼兵隊の下っ端を  
ぶった斬った。

「やっぱり格好つけてタバコばかりふかしてるだけじゃ腕は落ちるんじゃないですかイ？」

「うるせー！今に見てる！ほら近藤さん！あんたも住民の避難は山崎たちに任せてこっち来て戦え！」

「おー！お妙さんは俺が守るー！」

近藤、土方、沖田を中心に真選組が奮闘している中、すぐ近くでは

新八、神楽が大暴れしていた。

「おらー！クソ兄貴ー！早く下りて来いアル！雑魚に用はないアル  
ネ！」

「江戸を守るため、そして銀さんの力になる！さあ、かかってこい  
！」

子供二人だと思ってなめてかかっている奴らがバタバタと倒れていく。  
まだまだ年は若いが、実戦経験豊富なので並の人間では歯が立たないようだった。

「高杉め。」

アホみたいに派手にしおつて。攘夷志士の風上にもおけぬわ！あとで覚えていろ！」

桂はその頃、同志たちと共に住民の避難の手助けに奔走していた。

「住民を火の届かない場所まで先導しろ！女子供が最優先だぞ！」

「桂さん！いいんですか？我々も戦いに参加しなくていいんですか？」

「革命とは江戸に住む民の上に成り立つものなのだ。それを忘れるな。」

桂は若い浪士に国道を熱く説きながら同志達を引っ張っていた。

（そうはいったものの銀時！戦況はやはり悪い！頼んだぞ！）

桂は胸の中でそう叫びながら。

一方、その頃我らが銀時は…

「サベー、サベーよおい。」

…寝坊していた。くそ二ートの得意技をこの大切な日にも存分に発揮してしまったのである。

「おいおい洒落んなんねーぞオイ。新八と神楽もいねーしよ。何かむちゃくちゃ外騒がしいし完全に始まってます感出てるじゃん。どさくさに紛れて最初からいました感出すかおい。」

情けなさに涙の出てきそうな銀時はそんな下らない事を考えながら銀時は外に出た。

「おーみんな派手にやってるねー。よく燃えてら。」

万事屋の外に一步出た瞬間、町は戦場になっていた。しかし、桂や真選組の活躍からか、住民たちはあまり犠牲になっていないようである。

「あーどこ行くかなあ。てか神楽や新八はどこだ？」

銀時はブーツと歩きながらそんなことをぼやいていた。やはり出遅れてしまった時から生じる周囲との温度差というのはいつの時代も顕著に出てくる。

「久しぶりだね。侍くん。」

銀時はパツと目を見開き、若き少年のほうへ振り向いた。相変わらずニコニコと笑顔の絶えないヤサ男という感じだが、この男の驚異的な強さは充分知っている。

「おいおいいきなりてめえかよ。こちとら本番前の準備運動もしてねえよ。」

宇宙海賊春雨の第七師団長にして宇宙で最強の戦闘一族と言われる夜兎の中でもずば抜けた実力をもつ、神威がいきなり目の前に現れた。

「まあまあ。ちょっと遊んでよ。」

そう言い、神威はいきなり銀時に向かっていき、夜兎独特の武器である傘を振り抜いた。しかし、銀時は冷静にそれを自分の剣で受け止め、横に流した。

「おいおい運動会では準備運動も大切だけど、競争でフライングもしちゃいけないーの知ってるか？何か気まずい空気流れるの知らねー  
だろ？」

「知らないよー。いいから次行くよー。」

神威は銀時の言葉を聞き流し、間髪入れずに次々と攻撃を仕掛けた。その度に銀時は華麗に受け止めていたのだが、自分から攻撃をする様子は見せなかった。

「どっしたの？何で反撃しないのかな？」

神威は不思議そうに白き侍に問いかけた。

（まあ、あれだけ攻撃して全部返された経験もあまりないけどね。）

心の中で少し驚きながら。

「てめえだってやる気全然ねえだろが。殺気も何も感じねえやつに俺の息子は使えねえよ。」

「さすがだね君は。やっぱり一味違うし、動きも綺麗だよ。あの人にそっくりだな。」

神威は相変わらずニコニコしながらそう答えた。やはりこの白き侍との戦いは楽しい。しかし、神威は残念そうに武器である傘をしまった。

「あの人とかいうのに言っとけ。派手にするのはいいが、寂しいん

だったらてめえがこっちまで出向きやがれってな。あと、俺の周りのやつらに何かあったら絶対許さねーってな。」

「わかったよー。じゃあそろそろ帰らないと怒られるから行くねー。あつうちのバカ妹によろしくね。あと、準備運動出来てないって言ってたから適当に相手呼んどいたからよろしく。」

そういつて神威は銀時の前から一瞬で姿を消した。

「相手？なんだそりゃ？」

銀時は意味わからんと言った様子で剣を腰にしまおうとしたのだが、

「こらめてめえか団長が相手してやれって言った奴は！？」

「おうおう大して強くなさそーだな！オイ！」

銀時は何かガラの悪い奴らの声が聞こえると思って振り向くとそのままガラの悪そうな奴らが20人ぐらいこっちを見て野次をとばしていた。

「おらいくぜー！」  
「おー！」

ガラの悪そうな奴らは一斉に銀時に飛びかかったが、銀時は面倒くさそうにパツとよけた。

「てめーらみたいなヤンチャな奴らは昔から慣れてるから嫌いじゃねーけど、向かってくるなら仕方ねえな。」

……約3分。銀時は3分で20人をすべて叩きつぶした。

目の前の敵を一振りで薙ぎ倒し、真剣ではないので量は少ないが、返り血を髪や衣服に浴びながら敵を倒す姿はあの頃に少し近づきつつあった。誰からも恐れられた、白夜叉と恐れられたあの頃に。

ようやく役者が揃い、戦場もより激しさを増していった。

~~~~~

「ただいまー。あれ？艦長どうしたの？こんな早い時間からお酒なんか飲んだらいざというとき体動かないよ。」

銀時との手合わせを終えた神威は船に戻り高杉のもとへと向かった。銀時と勝手に一戦交えてきたことを咎められると思っていたのだが高杉は神威の予想に反して1人地上を見つめながら酒を飲んでいた。

「どろだった？あいつは。」

「やっぱりいいね。まだまだ本調子じゃなかったけどそのへんの奴らとはレベルが違うね。」

「まあ当然といやあ当然だがな。」

「動きも綺麗で花が舞ってるみたいだったよ。それに艦長に何となく似てるよつな気がするなあ。」

「一緒にすんじゃねーよ。まあ今日はてめーもマジじゃなかったのはわかってるから何も言わねーが他にも腕の立つ奴が何人かいるよ。うだからもう勝手な動きすんじゃねーぞ。」

「艦長、楽しそうだね。」

神威はふと高杉に問いかけた。

「まあ戦は祭りだからな。所々で花も咲いてきたようだし、これからもっと面白くなるぞ。」

二人は戦を楽しんでいた。壊すべきものがある。倒したい奴がいる。

守りたい奴がいる。救いたい奴がいる。
皆、戦う理由は異なるが、それぞれ戦場に立ち、それぞれ自分の武士道を掲げ、花を咲かせていく。

7・戦場に咲かす花（後書き）

ありがとうございました。

戦争をどういつ結果で終わらすか、考えるだけで頭がいたいです。笑

見ていただいた心の広い方、感想お待ちしております。

8・白が舞い降り赤が散る（前書き）

何か話が前に進んでいませんね。

あと敵のことを「敵」とか「相手」としか表現していませんが、適当に名前つけたほうがいいですかね。

8・白が舞い降り赤が散る

「あー疲れた。」

春雨の精鋭20人を一瞬にして倒した銀時はふらふらと燃え上がる街を歩いていた。

「あー。何かむかついてきたな。何なんだこれ。」

銀時は静かに怒っていた。

江戸の町が燃えている。

住民が恐怖を覚えながら逃げている。

斬られてケガをってしまった人がいる。

泣いている子供がいる。

自分が、…仲間が暮らしている町が破壊されている。

）何なんだマジで。ふざけんじゃねーぞ。
（

銀時は抑えようのない怒りで自分の中で何かが変化している感覚を
覚えていた。

あれからの自分が、…あの時の自分に戻っていく感覚を。

「おーてめーが坂田銀時かこら!？」
「

「おーおーてめー殺すとボーナスでるって神威さんと艦長が言ってくれてんだよおい！」

また先ほど叩き潰したようなガラの悪い奴らが集団で現れた。自信満々な態度から多少は腕に覚えがあるようであるが。

「おい。俺は今、生理中の女ぐらいイライラしてんだよ。ブツ飛ばされたくなかつたら消えとけよ。」

銀時は静かに忠告した。だが、そんな忠告を聞くような相手ではなかった。

「…うぜーな。」

銀時は剣を抜き、足を一步前方へ踏み込んだ。

「おらおらかかっていじやい…」

相手が挑発する際に、一瞬気を抜いたその刹那、銀時は、また足を踏み出し、一気に間合いをつめ、剣を天から地へと振り抜き相手を叩き潰した。そして地面へ伏した輩を氷のような目で睨み付けた。

まさに一撃。

レベルのちがう相手に残りの敵は完全にひるんでしまっていた。いつもの銀時ならこういう状況に陥った場合、適当にあしらって戦わずに済むようにするのが、さきほどから目覚めはじめていたあの頃の血が、それを許さなかった。

「まさか終わりじゃねーだろな？イライラしてんだから黙って死んどけよ。」

そういつて戦意を消失してしまっている相手に対して容赦のない連続攻撃をはじめた。

「もう勘弁してくれ！俺らは高杉の野郎に無理やり雇われたんだよ
！」

「そつだよ！好きにだけ自由に暴れていって言われたからわざわざ
ざ来ただけなんだよ！もう何もしねえから勘弁してくれ！」

まだかろうじてまとも意識があり、話をする事が出来る二人が
銀時にやめてくれと懇願しはじめた。もう自分たちに勝ち目はない。
ましてや一撃だつて反撃を喰らわすこともできないだろうと悟り、
まだ攻撃の手を止めようとしなない銀時に、助けてくれと意思表示を
示したのである。

「言いてえことはそれだけか？」

「えっ？」「」

「高杉に頼まれた！？自由に暴れていいから来た！？もう何もしない！？てめえらぶざけるなよ。じゃあここで根はって必死こいて生

きてる奴らが何で倒れてんだ？そのガキはなんで親の倒れてる姿を見て泣いてんだよ？全部てめえらだろーが。」

「いやだからそれも高杉の野郎に言われて……」

「てめえらに救いなんてねえよ。」

銀時はそう言いきり、残りの敵二人のうちの一人を倒した。既に出血している頭を何度も木刀で叩き潰しながら。

「そうどころか？知らねーやつをへらへら笑いながら襲ってたやつが助かる道理なんてどの星行ってもねーよ。」

「いいから死ねよ。」

銀時がそう言い、剣を振った瞬間、振り抜こうとしているはずの右手がなぜか止まった。いや、止められたというほうが正しいだろう。

「はなせよ。………ツラ。」

「ツラではない。桂だ。」

振り抜く瞬間、相手を斬る瞬間に間に割って入ってきたのは旧友の桂小太郎であった。

「もうよいであろう銀時。敵ももうこの状態では暴れまわらない気も起きないだろう。」

そういつて桂は敵のほうをチラッと見た。

敵は完全に戦意を消失し、目もうつろになっている。悪く言えば、半泣き状態である。

「何甘いこといってんだツラ。どんだけこっちが被害被ってるかわかんねえのか？」

「町はすぐ直せばよい。人は絆があればまたすぐ戻ってくる。平和な世にさえなればな。」

桂は銀時にそう諭すように述べ、剣をしまつように促した。

すると半泣き状態になっていた敵が、いきなり立ち上がって逃げようとしていた。

「ばーか！こんなとこ早く滅んじまえ！甘いんだよこのくそロン毛
！やっぱ高杉さんの言ってた通りてめえら……………」

その瞬間、そいつの首が飛び、辺り一面に血が飛び散った。桂が一瞬にして剣を抜き、瞬殺したのである。

「…………おいッラよ。君は言ってることとやってることが違いすぎな

「いかい？」

「ツラではない、桂だ。いやーむかついたね。うん。多分斬っても良かった系じゃないだろうか。」

「いやいや！俺もムカついてる感だいぶ出してたよね！？お前よりも！むちゃくちゃシリアスな感じ出してたのにお前がシリアスな感じに乗っかってきたからやめたんだよ？わかってる！？？」

「銀時よ。革命とは人の上に成り立つものなん……」

「それ前回も下っぱに向かって言ってたよね！？何ちよつと気に入ったからってもう一回俺に向かって言ってたんだよ！」

「ふつ。こまかいことをだらだらと。相変わらず器の小さき男だな。だからモテないのだ。」

「うるせー！俺がモテないのは中身じゃねえ！もし天然パーマじゃなかったらモテモテのチャラ男になってたわ！」

「わかったわかった。もうよい。………で、銀時。すごい返り血だな。あまり無理はするなよ。」

桂は銀時の文句をさえぎり急に真面目に話をしだした。

「……………」

銀時はただ黙って話を聞いているが、何か別のことを考えているか何か思い出しているような表情をしていた。

「お前は今はもう一般市民だ。あの頃のように皆の先頭にたって血を流さなくてよい。」

桂は銀時の事を心配しているようだった。普段は口喧嘩ばかりだが、やはり信頼し、大事に想っているのだろう。

「うるせーよヅラ。だいたいてめえが夜叉がどうだのあの頃に戻れみたいなことを俺に言ったんじゃないか。どっちなんだよ。」

「……………そうだったな。確かに夜叉に戻れと言ったし、それも本心だ。だが銀時よ。それでも無理はするな。お前にももう仲間がいるであろうっ。」

「うるせーよ。何が言いてえかわかんねーよ。」

「俺もわからん。ただ俺はもうお前に何も失ってほしくないだけだ。」

「だから戦ってんじゃないか。まあ俺はやりたいようにやらあ。」

「自分の武士道…というやつか。」

攘夷戦争時代、さまざまなかんじを経験し、さまざまなかんじを失い続けた二人。

戦争の先に何かがあるか、二人はよく理解している。

「いたぞ！あいつらじゃねえか！？」

「おーそうだ。二人揃ってやがるぞ！」

「よっしゃ！俺たちがあいつらの首をとるぞ！」

「…次から次へとそろそろとご苦労なこった。しかし何人いやがん

だ。後ろのほう見えねーぞ。」

「ふっ銀時よ。久しぶりに二人で背中を合わせて暴れてみるか？」

「何にやにやしてやがんだ。気持ち悪い。」

「うるさい！いいから前見て戦え！………だが、安心して背中を預けられる戦友ともというのはなかなか出会えないものだ。俺はただそれがつれしい。」

「友達自体いねーもんなお前は。かわいそうな奴だな。」

「やかましい！ほら来たぞ！！」

何人も敵が一斉に斬りかかってきたが、二人は見事としか言い様のないコンビネーションで次々と敵を斬り倒していった。

いくら束になってかかっても共に修羅場をくぐり抜けた二人には敵ではなかった。

「銀時！生きてるか！」

「あたりめーだ！誰だと思ってんだ！それに………」

「それになんだ？」

「俺の背中を守ってくれてんのは誰なんだよ。」

「ふっ。それもそうだな。」

激化していく戦争の中で、各地で血が飛び散る中で、無数の敵が次々と襲いかかる状況でもこの二人に敵はいなかった。

「「待ってる高杉!!」」

8・白が舞い降り赤が散る（後書き）

最後までありがとうございます。何かおもしろい方向には全く進んでないですね。

次からは少し話を進めれるよう頑張ります。

9・集いし者たち（前書き）

短いですが、久しぶりの更新です。

9・集いし者たち

戦はますます激しくなっていた。

町は燃え、建物は崩壊し、戦いに敗れた者たちは地に倒れている。

弱い者は死に、強い者が生きる。

どんな綺麗事を並べてみても、戦場ではやはりそれが真実だと思いき知らされるような光景だった。

そんな凄惨な場でこの男たちはやはり生きていた。

「おー！将来の弟、新八君！無事だったか！」

「誰が弟だこら！姉上をゴリラなんかには死んでも渡すか！！」

新八、神楽と真選組が合流した。元々すぐ側で戦っていたというのと、建物が次々に崩壊していき、視界が広くなってきたのでお互い容易に見つけ出すことが出来た。

「へー。チャイナ、まだ生きてたのかい。メスのくせにしぶといねえ。」

「うるさいアル。お前はさっさとその辺で肉の塊になってるがヨロシ。」

「して、新八君。お妙さんは無事なのか？」

「そつだ。てめえらのまわりの住民たちは無事なのかよ？」

興味なさそうにタバコを吹かしながら新八に住民の安否を確認しているのは土方だった。

「土方さんよオ。皆に先にセリフ言われたからって急に真面目な感じ出して好感度あげようとすんのはナシですぜイ。死ね土方。」

「そうアル。正直、どんなセリフを吐いても女々しさしか残らないアルよ。」

「てめえら。どの口で言いやがる。」

沖田、神楽の極悪コンビに責め立てられ怒りをあらわにする土方。

「まあまあ。皆さん。落ち着いてくださいよ。土方さん、姉上や他の住民の方々も避難しているので無事です。」

新八は空気が悪くなったのを感じ、土方に急いで説明をした。この辺りの気の使い方はさすがである。

「それで？旦那はどこにいるんでイ？」

真選組が一番気になっているのはそこだった。

高杉とは桂同様に間違いなく因縁があると踏んでいるので銀時を問いただせば高杉の場所がわかると踏んでいた。

「お前らなら知ってんだろ？おそらく桂の野郎といるってのはわかっただが。」

「……………桂さんを逮捕するんですか？」

新八は土方に問いかけた。新八、神楽は昨日の話で銀時、桂、高杉のおおよその関係は知っている。なので出来れば三人にきちんと決着をつけてもらいたい。だから今

日は銀時と行動を共にせず、後方支援として、住民の避難と沸いてくるような雑魚を相手にしていたのであった。

「安心しろ。こんな状態で今さら桂を捕まえても意味がねえよ。それに俺たちももう幕府からは切られてるかもしれないな。」

「ああ。今は、高杉の軍団から江戸を守るのが第一だ。一緒に頑張って町を守ろう。」

「はいー! (アル)」

「あれっ? 何やってんのこんな所で。まさか俺に黙って今から遊びに行く計画たててたんじゃねえの? 何だオイ。冷たくなつたもんだな。」

「銀時よ。仕方ないのだ。新八君とリーダーの年齢を考えてみる。あの二人に比べるとお前なんかただの加齢臭が出始めたおっさんでしかあるまい。」

たちあがる炎と煙の中から聞き慣れた声が二つほど聞こえてきた。

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

「桂、てめえ！」

「おい、トシ。言っただ側から止めとけよ。」

「旦那あ。えらい暴れたんじゃないですかイ？」

現れたのは銀時と桂であった。

二人の衣服や髪に飛び散る返り血と多少の切り傷が戦いの凄まじさを物語っていた。

「へっ。えらいおなじみの面子が集まったもんだなおい。」

「ほう。幕府の犬もいるではないか。パシリなどで忙しいはずなのに、ご苦労なことだな。」

「てめえ桂あ!!」

桂の冗談なのか本気なのかわからない嫌みに土方がぶちギレ寸前だった所を近藤が止めた。

「桂小五郎。今は攘夷がどうこうより江戸を守ることが最優先だろう。今日だけは力をあわせて戦わないか？」

近藤は桂に柔らかい物腰で頼んだ。

「ふっ。もちろんだ。江戸を思う気持ちは皆一緒だからな。」

「てめえら、戦んのはいいが、死ぬなよ。相手は派手好きな奴だから何してくるかわかんねえぞ。」

「ふっ。誰にももの言っている銀時よ。」

「派手好きなら俺も負けねえですぜい。」

「頑張りましょう銀さん。」

「兄貴と決着をつけるアル！」

「お妙さん！待っててくださいーいー!!」

「ふっ。見てろ高杉暴れたおしてやるぜ！」

~~~~~

「艦長ー。何か思ったより上手く行ってないみたいだね。」

「ふつ。あんな雑魚どもバラまいたぐらいでどうにかなると思うっちゃいねえよ。」

高杉と神威は船の上から下を見下ろしながら話合っていた。

「艦長、俺はダラダラするのはあまり好きじゃないんだけどね。」

「ふつ。奇遇だな。俺も全く好きじゃねえ。おい、艦内全員に伝える。祭りに参加しにいっぞってな。」

「そっぴなくっちゃ。」

~~~~~

やっと役者が揃った。

それぞれがそれぞれの想いを持ち、戦いに挑んでゆく。

最後の対決はもうすぐそこまできていた。

9・集いし者たち（後書き）

ありがとうございました。やっと全員とりあえず揃いました。あとは戦っただけなのですが。

なかなか難しいですね。

10・再会は血刃とともに(前書き)

文がまとまりきらず中途半端になっています。

誤字脱字に気をつけました。

10・再会は血刃とともに

役者がとりあえず全員揃い、士気は高まったのだが、それに反して辺りはやたらと静かだった。

敵の姿は見当たらず、どこを見渡しても戦いに負けて倒れている者ぐらいしかなかった。

「銀さん、やけに静かですね。敵の姿も見当たらないし。」

「……んー。」

「どこかに隠れてるんじゃないアルか？いきなり襲ってくるような変態タイプかもしれないアル。」

「いや、いきなり襲ってくるタイプの変態とは限らない。もしかすると陰にこっそり隠れて俺たちを見つめては興奮しているタイプの変態かもしれないぞ。」

「キモいわ！リアルにキモいわ！！」

「お前マジでキモイアル。死んだほうが世の中のためにヨロシ。」

近藤が真面目か本気がよくわからない気持ちの悪い言葉を発したた

め、新八が勢いよく突っ込みをいれ神楽が心の底から蔑んだ。

この連中に戦の最中だからといって緊張感というものは全くなかった。

「おい万事屋。高杉らは何が目的なんだよ？あと高杉と一緒に行動しているっていう天人は何者が知っているのか？確か春雨とかいう宇宙海賊っていう情報は入ってるんだけどよ。」

「そつだ銀時。このクソ幕府の犬どもに同調するつもりはないが高杉と一緒にいるのは春雨という情報は俺にも入っているが、どんな

輩なのは俺も知らない。銀時は知っているのか？」

「あー？まあちょっと会ったことはあるけど。友達ではねえなあ。」

「そんなことはわかっておる！でっ！腕は確かなのか？」

桂はブーツと死んだ魚のような目をしながら答える銀時に少し苛立ちを覚えつつ春雨の事を尋ねた。

横にいる土方と沖田も黙って話を聞いているが、やはりその春雨のトップが何者なのかというのは気になっているようだった。

「あーうるせえなあ。今俺がわざわざ説明しなくても会ってみれば
わかんだろっが。」

「何を適当な事を言っているんだ銀時！戦において大事なのは相手
の情報だと言っつのは貴様も知っつているだろっ！？」

「気に入わねえが桂の野郎の言っ通りだ。何か知っつてんならさっさと
教える。」

土方と桂はなかなか教えようとしないう銀時にどんと苛立ちを増幅させていった。

「旦那あ。何で教えたがらねえのかはわからねえですが教えてくれたほうが旦那の為にもいいんじゃないかねえですかイ？どうせ高杉の野郎の相手すんのは旦那でしょーよ？じゃあ他の奴らは俺らで相手するしかねーでしょう。」

口うるさく銀時に問い詰めていた土方、桂と違い、黙って聞いていた沖田が口を開き銀時に問いかけた。

「……………」

沖田はここまで言われて黙っている銀時に少し違和感を感じ、もしかすると言えないのでなく言いたくないのではないかと考えた。

「うちのバカ兄貴アル!!」

「そして宇宙海賊春雨の第七師団長で有名な戦闘一族『夜兎』の中でも恐らく一番強いんじゃないかって言われている奴ですよ。そうですよね銀さん？」

ずっと黙っていた銀時に代わって口を開いたのは新八と神楽だった。

「何でお前らそんな事知ってたんだよ？俺は言った覚えねえぞ。」

銀時は二人が神威や春雨の事を知っている事に少し驚いていた。

そして銀時が土方や桂に対して口を閉ざしていたのも神威のことを説明するにあたって神楽の兄と言わなければならなかったのが原因だった。

今から戦わなければならぬ相手が仲間の家族というのは神楽の事を考えるとあまり言いたくなかったのである。

「銀ちゃん！隠し事も気遣いもいらないアル！」

「そうですねよ！僕らも戦に参加してるんですから覚悟はしてます！」

新八と神楽はそう力強く銀時に言い放った。銀時はそんな二人を見て軽くフツと笑みを浮かべた。

「そうか。悪かったな。」

「何でえ。チャイナの兄貴かよ。お前が住んでる星に戦争しかけるてー事は仲悪イんだなお前の家族。」

「総悟。引つ掛かるところはそこじゃねーだろ。問題は夜兔ん中で一番強えつてところだ。まああのハゲ親父の血をひいてるって事だろーけどよ。」

「あのバカ兄貴はアタシが相手するアル！あいつとは決着つけなきゃいけないアルヨ！」

神楽は全員に向かつてそう叫んだが、相手は夜兎の強者ということ
で神楽1人で相手をするには厳しいのではないかと全員が思った。

「神楽。あいつとやりたい気持ちはわかるが、お前じゃまだあいつ
には勝てねえよ。さっきもちよつとあいつとやり合ったがあいつは
強え。それにお前もあいつには勝てねえって自分でもわかってんだ
ろ？お前は自分に出来る事をしろ。それが戦ってやつで守る戦いつ
てもんだ。」

銀時は静かにそう話し、神楽を説得した。納得のいかない様子だっ
たが、江戸を守るためと自分に言い聞かせ渋々納得した。

「てめえさっきもやりあったってんならさっさと見えよ！」

「そつだ銀時！……で、確かに強いのか？まあ、夜兎と聞いて大体想像はつくが。」

「強えよ。高杉の野郎が一緒じゃなかったら俺が相手してるとこだ。まあ俺がやった所で勝てる保証はどこにもないけどよ。」

銀時が相手をしても勝敗はわからない。それだけでここにいる全員が神威はどれほど強い奴なのかというのが理解できた。

「そうか。ならば俺が相手をしよう。」

「何寝ぼけた事言ってるだ桂。そいつは俺がやる。」

「二人とも一回死んでください。俺がやるぜい。」

桂、土方、沖田が言い争いをはじめた。この三人の意見が一致する
ということとは恐らくないだろう。

「まあ今は誰がやるとかでモメている場合じゃない。他にも敵はま
だまだいるだろうし、状況を見て判断しよう。」

言い争いを続けている三人に対して久しぶりに話をする機会を得た
近藤が三人をまとめた。

銀時はしばらく三人を面倒くさそうに見ていたが、辺りの空気が一変したのを感じとり、真剣な顔つきになった。

「銀時よ。ついに来たか。」

次に気付いたのは桂だった。やはり本物の戦争を経験している二人は微妙な空気の変化を敏感に感じとったのである。

そんな二人を見て周りもようやく気が付いたようである。

しかし、全員が前を見据えて体勢を整えた瞬間、轟音が響き渡り、町が一瞬にして爆発し、火が燃え広がった。その衝撃で周りを見渡せなくなってしまうが、こちらに向かってくる軍団がしばらくしてうっすら見えてきた。

「久しぶりだな銀時。ツラ。ケリつけにわざわざ来てやったぜ。俺が開いた祭りは楽しんでるか？」

「はは。最初に出ていった雑魚はみんなやられてるね。結構いたのになあ。すごいねこの人数で。いやあ楽しみだなあ。」

ついに高杉と神威がその轟音と共に姿を現した。

「てめえチビのくせに相変わらず派手好きじゃねえか。身長のせいで普段目立ってねえからってそんなに目立ちてえか？」

「高杉よ。久しぶりの再会を喜ぶ間柄ではもうないが、会ったついでにお前のやり方が間違えているということをお前を今日身をもって教えてやるぞ。」

「ふーん。あれがチャイナの兄貴かい。あんまり強そうには見えねえなア。」

「けつ。好き放題やりやがって。一人残らず斬ってやらあ。」

「油断するなよ昏。相手のほうが数が多いんだ。慎重にいくぞ。」

「神楽ちゃん。いこう！頑張って江戸を守ろう！」

「わかってるアル！自分に出来ることをやるアルヨ！！」

姿を現した高杉、神威の軍団を見て全員が戦闘体勢に入った。

ついに始まった直接対決。江戸を舞台に敵や仲間は無関係なく高杉、神威を相手に決戦が始まるうとしていた。

10・再会は血刃とともに（後書き）

ありがとうございました！

ようやく高杉と対面しました。次話もあまり話は進まないような気がします。

11・溢れる想い、衝突（前書き）

久しぶりの投稿です。

ちょっと行間の空けすぎを指摘いただいたので注意して書きました。

11・溢れる想い、衝突

銀時たちの前に姿を表した高杉。

高杉は戦いを始めるといふ感じは出さず、ただ周りを見渡した。

(ガキ、メガネ、ツラ、んっ？あいつらのあの服は確か…)

高杉は銀時の周りをダルそうに見渡していたが、真選組の三人を見た瞬間目の色を変えた。

「おい銀時、ツラ。今から一つだけ質問するから答える。」

「何だよチビ。君はまだまだチビだからね。分からないことがあるなら何でも聞きなさい。」

「銀時よ。あまりチビにチビと言ってやるでない。人は誰しもコンプレックスというものがあるのは分かっているであろう。そしてそれをバネにして大人に成長するのだ。」

銀時と桂は目の前に真の敵が現れてもいつものような意味のない会話をしだし、銀時の周りは少し驚いていた。

「相変わらず無駄口の多い奴らだな。まあいい。昔からのことなんだからもう治らねーんだろつよ。」

高杉はフツと呆れたような顔で笑いながら呟いた。だがまだ聞きたいことを聞いていない。

「おいてめえら。何で真選組の奴らなんかといやがんだよ？まさか
てめえらクソ幕府の仲間にも入れてもらったんじゃねえだろな？」

高杉は再び怒りを取り戻しながら二人に問いかけた。ただでさえ幕
府が嫌いなのに思わぬ所で現れた真選組に心底怒りを覚えた。

「別にこんな奴らと仲良しこよししてるわけじゃねーよ。だが江戸
に住む人間にとっちゃこいつらがいることに違和感なんかねえんだ
よ。」

「確かに真選組がいる事に不愉快さを感じる気持ちはわかるぞ高杉。
しかし、今は俺達はお前から江戸を守らなければならぬ。だから
一緒にいるのだ。」

二人は各々自分の考えを高杉に答えた。しかしそれを聞いた高杉は言い様のないほどの苛立ちを二人に感じた。

「江戸に住む奴にとって普通？江戸を守るために共に戦う？てめえらそいつらは幕府の手先なんだぞ！？幕府の奴らが俺達から何を奪ったのか忘れたわけじゃねえだろが！」

高杉は二人に声を荒げながら問いかけた。二人はそれを黙って聞いていたが周りの新八や神楽、真選組のメンバーは何を話しているのかよくはわからなかった。

「幕府は俺達から松陽先生を奪ったんだぞ！？生きる道も術もない、ゴミみてーな生活をしてた俺達を拾って育ててくれた松陽先生は幕府の奴らに殺されたんだぞ！？忘れたのか！殺された後、無残に晒され、見せ物みてえにされた先生の首を！お前らも見ただろ！」

二人はまだ黙って聞いていた。銀時は何を考えているか読み取れな

いような無表情で。桂は目を閉じながら少し苦しいような嫌なことを思い出したような表情で。

「お前らならわかんだろ！？特に銀時！！てめえ松陽先生に拾われる前の生活を忘れたわけじゃねえだろ！あの頃、…終わりの見えねえ戦争の中で、死骸の山になった荒れ地ん中を1人で死体相手にハイエナみてえに追い剥ぎしながら何とか生きてたお前に光を与えてくれたのは誰だよ！剣を、道を教えてくれたのは誰なんだよ！」

相変わらず銀時は無表情だったが、桂以外のメンバーは高杉の話聞いて、目を見開いて驚いていた。銀時の過去を初めて聞き、その凄まじい過去にメンバーは絶句した。

「初めて聞いた。銀さんの昔のこと。そんな悲惨な過去があったのか。恩師を幕府に殺されてるなんて。」

「銀ちゃん。先生をなくしてたんでアルか。相変わらず幕府のすることはわからないアル。」

新八、神楽は銀時の過去を聞き、初めて銀時の隠れてた部分を知った。

「攘夷戦争時代、親をなくし、生きていくことの出来ない子供がたくさんいたとは聞いていた。そしてそんな子供達を集めて学問や剣道徳を説きながら生きる道を教える人々がいたことも。松陽先生という方もそんな素晴らしい人間の中の1人だったんだろうな。そんな人を…。俺達と言えることではないが相変わらず幕府は腐ってたんだな。」

「けつ。今に始まったことじゃねえだろが。もうとっくに腐りきってたんだよ。」

「旦那はそんな時代を生き延びてきたのかい。どおりで強えはずだ
ぜい。」

近藤は自分が仕えてきた幕府のしたことに憤りを感じ、土方は腐り
きった幕府の昔を垣間見てますます嫌気がさした。そして沖田は銀
時の生き方にその強さの理由を知った気がした。

「おい高杉！もうこれ以上言つな！俺とて今でも幕府は憎い！今で
も先生の事を思い出しては、幕府の連中を皆殺しにして全てを無に
してしまいたいと思う時がある！しかし高杉よ！仮にそんな事をし
たとして松陽先生が帰ってくるわけではないだろう！？どれだけの
事をお前がしたとしてもそれだけは変わらんのだぞ！？」

「うっせーよツラ。んなことは俺だってわかってんだよ！だがな！

もう止まれねーんだよ！！ツラ！てめえは何で我慢できんだよ！！？」

「我慢をしているのではない。自分の感情を抑え、まず世を第一に考えると教えてくれたのは誰だ！？」

「くっ……。」

「それに…、銀時が耐えているんだぞ？一番辛いはずの銀時が耐えているのに我々が耐えられんでどうする！？」

高杉と桂の言い合いを聞いていた周りのメンバーは何も言えずにいた。ずっと銀時のそばにいた新八や神楽も、そしてずっと桂を追っていた真選組のメンバーも。三人の過去はあまりにも壮絶すぎた。誰も口を開けない中でようやくあの男が口を開いた。

「なあ高杉よ？おめえは結局何がしてえんだよ？」

ずっと黙っていた銀時が急に口を開いて周りのメンバーは驚いた。隣にいる桂も。そして桂は銀時をチラッと見て、銀時の様子がおかしい事に気づいた。

「おい銀時？どうした？」

(この目は、この雰囲気は最近の銀時のものではない。まさか、こいつ…)

「お前はここに何しに来たんだよ？手下大勢連れて昔の仲間と思

出話でもしに来たのかおい？」

「てめえ何言つてやがる！？んなわけねえだろが。」

「そつだよなあ。俺も違うし。今ここに必要なのは話し合いじゃねえだろ。高杉よー!!」

そう言つて銀時は剣を抜き、一気に高杉に斬りかかった。高杉は不意をつかれたが、刀を抜き銀時の太刀を受け止めた。

「もう昔話に花を咲かせるほどの仲じゃねえだろ？こつから必要なのは話し合いじゃなくて殺し合いだろ。それにてめえは昔から根暗のくせにおしゃべりがすぎんだよ。んなことだからてめえはモテねんだよ！」

「（こいつのこの目。あの頃と同じじゃねえかよ。：戻りやがったなこいつ。）ふっ。一番モテねえてめえにだけは言われたくねえな。おしゃべりついでにもう一つ言っておくが、てめえがモテねえのは髪の毛のせいじゃねえよ！」

そう言って高杉は銀時に斬撃を返した。そしてこれが最後の戦いの幕開けとなり全員が戦闘を開始した。

11・溢れる想い、衝突（後書き）

ありがとうございました！

…話が全く進んでいませんね。誰と誰を戦わすか、ご意見、ご要望があればお願い致します。（ご意見、ご要望がなければ書けないかもしれません！笑）

12・選ぶべき相手(前書き)

戦う相手も大体決まりました。

短めですが連続投稿です！

12・選ぶべき相手

銀時と高杉の斬り合いによって戦いの火蓋は切って落とされた。

一太刀目は勢いよく銀時が高杉に斬りかかったが、その後は銀時の防戦一方であった。

「おいおい銀時よ。弱くなったのはマジなんじゃねえのか？白夜叉ともあるうもんが平和ボケたあ笑い話にもならねえぜ。」

「うるせえよくそチビが！お前のほうこそ身丈のわりに剣が長すぎてイマイチ振りきれてねえんじゃねえのか？オモチャ屋行ってちっこい剣買ってきたらどうだ？」

銀時は高杉の挑発にすかさず反論したが、どう見ても押されぎみだった。

高杉は強い。まともにやり合ったのは初めてだったが、銀時は高杉の実力に驚いていた。

「へっ相変わらず口だけは達者だな。だが剣が振りきれてねえってのは間違いだ。」

「あー？間違いつてのはどういうこと？」

「まだ振ってねえんだよ。」

そう言つて高杉は銀時の攻撃を横に払い、すかさず剣を高く天に振りかざし、一気に銀時の頭めがけて振り落とす。

(やべえ！油断した！間に合わねえ！)

ギーンー！！

鈍く高い音が曇天の空に響き渡った。剣と剣がぶつかる音が。

「情けないな銀時よ。体が髪の毛みたいになまっているぞ。戦いが終わったらやはりお前は俺と共に革命の道を歩むべきではないか？」

高杉の斬撃を受け止めたのは桂であった。銀時の窮地を見て一瞬で高杉と銀時の間に飛び込んで斬撃を剣で受け止めたのだった。

「おいッラ何邪魔してくれてんのよ。今二人で熱く盛り上がったところなのよ。」

「ふっ。俺が来なければお前の頭はホラー映画みたいになっていたぞ。映画はやはりホラーではなく純愛モノにかぎる。」

「ベラベラしゃべってんじゃねえ！次いくぞ！銀時、ツラ！」

戦いは因縁の三人の中でこれからさらに激化していくことになる。

~~~~~

「いいなあ艦長楽しそうだなあ。ずるいよ侍二人も相手してさあ。」

一方神威は少し離れた所で高杉、銀時、桂の戦いを見ていた。

「お前の相手はこのアタシアル！脳天ぶちまけてやるからかかって

くるがヨロシ！」

ぼーっとしている神威の前に神楽が立ちふさがった。先ほどあれほど神威とは戦うなと話をしていたのにもう忘れてるようである。

「いやいやお前とはやりたくないよ。あまり楽しくなさそうだしさあ。まだまだ俺のほうが強いでしょ。」

「そうだぜくそチャイナ。黙ってその辺で土方と並んで死んどけい。」

神楽の後ろから現れていきなり味方に暴言を吐いたのは沖田だった。

「おいおいその旦那ア。俺と勝負しろイ。お前さん強えらしいじやねえかい。」

「ははは。強いよー。そういう君は何者なんだい？強いのかな？」

神威は突然現れた沖田に向かっていつもの笑顔で問いかけた。

「こいつは申し訳ないねエ。真選組一番隊長沖田総悟。今からオメエの腹に刀突っ込んでかき回してやるから覚悟してくんなせエ。」

251

「オイこら税金泥棒！あいつは私がやるアル！お前はひっこんどくがヨロシ！」

「はは。二人ともやる気満々だね。少しはおもしろくなりそうだよ。んじゃまあいくよー。」

そう言って神威は二人のほうへ一瞬というにふさわしい速さで間合いをつめ、番傘を振りかざした。

「来るアル！」

「わかつてらい！チャイナ！死ぬのはかまわねえが邪魔はするんじやねーぜい！」

「こつちの台詞アル！お前も公務員ならたまには真面目に働いてみるアルよ！」

「何か君達はいつも楽しそうに喋ってるね。ほらほらいくよー。」

神威は凄まじい速さで番傘を何度も二人に叩きつけた。

(こいつぁマジで強えじゃねえかい。旦那が勝てるかわからねえてのもわかるぜい。)

「お前は絶対アタシが倒すアル!!」

~~~~~

「……土方さん。出遅れましたね。」

「ちつ違ーよ！様子を見てんだよ！まつ、全くあいつら何も考えなしに飛び出しやがって！ちつたあ考えろってんだよ。」

土方は完全に出遅れた感をごまかしきれなかった。すでに誰と戦えばいいかわからない疎外感に苛まれていた所を新八に声をかけられ、泣きそうになっていた。

「やっぱりマンガの主人公ってボケの出来る人なんですかね？やっぱり突っ込みはどれだけ頑張っても最前線には立てないんですかね。土方さんもたまにボケては話のメインになるうとしてるけど本当は無理してるんじゃないですか？」

「言つなアア！！それ以上言つなア！」

土方は新八のネガティブすぎる分析に叫ばずにはいられなかった。ただでさえ突っ込みのポジションに負い目を感じているのにボケた時のことをいじくり返されては死にたくなってくる。

「じゃあ雑魚は雑魚相手に頑張りましょーよ土方さん。」

「俺は雑魚じゃねエエエー！！」

高杉 v s 銀時 & a m p ; 桂

神威 v s 神楽 & a m p ; 沖田

雑魚 v s 土方 & a m p ; 新八

それぞれが強敵を相手に自分の剣を振るう。

戦はまだまだ始まったばかりだ！

近藤「えっ？俺は？」

12・選ぶべき相手（後書き）

ありがとうございました！

さて近藤はどうしましょう？笑

次回も頑張りますのでよろしくお願い致します！

13・夢追い人(前書き)

久しぶりの投稿です。

短いです。

13・夢追い人

いつからだ？こんなにも剣を振るうことに感情が動かなくなったのは。

いつからだ？目の前で血しぶきをあげて倒れていく人間を見ても何も思わず薄暗い笑みを浮かべるようになったのは。

いつからだ。己が振るう剣に夢が見れなくなったのは。

高杉はただそんな事を考えていた。

「オラオラくそチビ野郎が！ポーツとしてると頭カチ割るぞコラ！」

「ふっ。今こそ我が剣の力見せるとき！」

はっ。こいつらは何も変わらねえな。いつまでたっても剣一つで何とかなると思ってるやがる。

・いや。ならねーってのはわかっているはずだ。あんな目にあっただからな。それでもこいつらは変わらねえ。

馬鹿じゃねえのか？何でなんだ？

高杉は二人と己の差を考えていた。

「おいチビ

何だよさっきから。やる気ねーのか？ねーんだったらもうやめね？俺も疲れたんだけど。」

銀時は心ここにあらずの高杉を見ながらそういった。いつも戦の時は凄まじい剣と集中力を見せていた高杉だったが今はひどく散漫な動きをしていた。

「高杉よ。戦いの最中での考え事は命とりになるということをお前もよく知っているであろう？一体どういっつもりなのだ？」

桂もそれに続く。二人は高杉の異変に気がついていた。というより先ほどまでと違い、明らかに剣が鈍っていたのですぐにわかったのだが。

「お前らは・・・。」

高杉は二人を見ながら急に話し始めた。

「お前らは夢とかあんのかよ？」

二人は予想外の質問に少し驚いた。

「おいおい何を語り始めるつもりだおチビちゃんはや。」

銀時は笑って桂のほうを見てたが桂は真剣な表情で高杉を見ていた。

「当然だ。私の夢は今も昔も変わっておらん。友と仲間、そしてこの国のために剣を振るうことだ。」

桂はそう胸を張って真剣に答えた。まあ腐っても攘夷運動のリーダーなのだからこういった類いの答えは予想はできていたが。

「おい銀時。てめえはねえのかよ？」

「ねえ。」

あまりの即答に聞いた高杉も少し驚いていた。

「おい銀時！お前は本気で言っているのか？この年になって夢のこともないのか？まさかお前も生身の女よりダッチワ・・・」

「何言ってるんだバカヅラ。」

銀時は桂の失言に少しも慌てる事なく冷静に突っ込みをいれた。

そしてまっすぐ高杉のほうを見ながら話を始めた。

「お前らは知ってるんだろ？守りたい奴も守らなきゃいけない奴ももうとっくに全部いなくなっちゃまってんだよ俺は。」

その言葉に高杉と桂は息を飲んだ。

そつだ。あの頃、誰よりも仲間を守ってくれたのは先頭で剣を振るつた銀時だった。だがしかし、誰よりも仲間を守れなかったのも銀時だった。

鬼神の如き強さで相手を斬っていたが、守れる人間は限られている。

昨日命を賭けて守り抜いた人間が次の日の戦で死ぬこともよくあったのだから。そんな残酷な日々を過ごしたのだから無理もなかった。

銀時はふうと小さく溜め息のようなものをついた。

「俺はもうのんびり商売しながら暮らしてくんだよ。今さら誰かを守るのが夢だとかは鼻つたたれた理想は言わねえよ。」

銀時は淡々と飄々と、
いつも通りのテンションで話していた。

「お前は何でそれでも前を向ける？お前は何で歩いていけるんだ？」

高杉はあまりにもいつも通りな銀時に苛立ちを覚えていた。

「夢も何もねえ俺のそばにいてくれる奴らがいるからだ。そいつらがいるから俺は立つてられるし前を向いて歩いていける。」

264

銀時はいつものようならけた様子ではなくしっかりと高杉を見て答えた。

「お前にもいねえなんて言わせねえぞ。お前を信じて一緒に歩いてくれる奴がいるだろ？」

「うるせえよ。」

そうか。だからこいつは。

「んなもんいねえしとっくの昔にそんな考え捨てたんだよ！」

俺はずっと夢を見ることに夢見てただけの大馬鹿野郎だったのかよ。情けねえ。

「高杉。ようやく気づいたようだな。貴様の進む道にはとうに道はなかったのだ。夢を追って進むことに悪は一つもない。しかしお前の進む道に光はないであろう？そしてその事に気付かぬ貴様ではない。」

高杉は笑っているのか怒っているのか、はたまた泣いているのかわからないような顔をしながら桂の言った言葉を聞いていた。。

銀時と桂はそんな高杉をただずっと見ていた。

「うるせえよ。」

そうか。だからこいつらは・・・。

「うるせえ。俺には守るもんもいねえしとっくの昔にそんな考え捨てたんだよ!」

俺はずっと夢を見ることに夢見てただけの大馬鹿野郎だったのかよ。情けねえ。

「高杉。ようやく気づいたようだな。貴様の進む道にはとうに道はなかったのだ。」

13・夢追い人(後書き)

ありがとうございます！

そろそろ話は終盤にはいっります！

14・ただ逢いたくて（前書き）

久しぶりの投稿です！自分で自分のストーリーを完全に忘れていたので一からよみなおしました。

駄文っぷりは変わっていませんがよろしく願っています。

14・ただ違いたくて

あの日から……。

そう全てはあの日からだった。

先生に会えなくなったのも。

こいつらと俺の間に薄い、何か壁のようなものが出来たのも。

その壁が時がたつごとに厚くなっていったのも。

そのせいであいつらの声が聞こえなくなってしまったのも。

・・先生と別れてからだった。

俺は自分の野望のために剣を振るっていたと思っていた。

しかしそれは違っていたのかもしれない。

いつの間にか先生に会えない寂しさや辛さを剣をとり、人を斬ることとで忘れようとしていただけなのかもしれない。

そう思うと高杉は己の事が情けなく思えて仕方がなかった。

「へっ。どんだけ情けねえ剣だよおい。」

薄ら笑いというべきか、苦笑いというべきか、何とも言えない表情で独り言のようにつぶやいた高杉を銀時は見逃さなかった。

かつての自分と同じ顔だったから。

「その通り。情けなくて仕方ねえよてめえの剣もツラも。そんなんじゃ野菜も切れねえなあ。」

銀時は茶化すような言葉で高杉に言ったが至って真剣な表情だった。

「何だてめえ。馬鹿にしてんのかよ!」

高杉は見下されたように思え、銀時を睨み付けながら吠えた。

そして……。

「てめえも……。てめえも昔はこんなツラだったじゃねえか！」

今わかった。

こいつが白夜叉と呼ばれ、戦場で修羅のごとく人を斬り、維新志士の先頭にたって生きていたあの頃。常に圧倒的な強さを見せていたのに何故かいつも辛そうな、寂しそうな顔をしていた。

あの時はわからなかったが今ならわかる。

「てめえにだけは言われたくねえよ！」

高杉は続けて吠えた。

「銀時が言わなければ誰が言うのだ！」

ずっと横で銀時と高杉のやりとりを見ていた桂が言った。

「前に貴様に言ったな。銀時が耐えているのになぜ俺たちが・・・と。」

「それがどうした!」

「怒りや悲しみに任せて剣を振るった先にあの人の望んだ世が待っているとも思ったのか!それで世が貴様の思い通りにいくとも思ったのか!貴様のような信念のない剣に世が動くわけないであろう!」

桂は高杉にありったけの言葉をぶつけた。

銀時は桂の言葉を聞いて一瞬フツと笑みを浮かべ、高杉のほつに視線を送った。

「だとさ。ツラ先生のありがたいお言葉、てめえみたいな馬鹿には身にしみたか?」

「要するにてめえはテロリストでも反逆者でもましてや侍でも何でもねえ。ただの時代遅れの八つ当たり野郎なんだよ。」

「辛いことがあったから剣を振るうつてこともそりゃあるだろう。てめえにとつてマジで辛えことだったんだろうよ。それに人を斬るなどか悪いことすんなどか俺やヅラが言えた義理じゃねえよ。現にヅラなんか今でも捕まったら首持つてかれるぐれえの大犯罪者だもんな。」

銀時はニヤツとしながら一瞬桂に目をやった。

「おい銀時何を言っ……。」

「だがな高杉！それを全部先生のせいにするんじゃねえよ馬鹿野郎！てめえは結局自分がやらかした事を野望だ何だっつって全部松陽先生のせいにして逃げてんだよ！」

高杉は頭をなぐりつけられたような感覚を覚えた。

「だいたい考えてみるよ高杉ちゃんよ。てめえみてえな背も器も小せえ男がどんだけ背伸びしたところで革命なんか起こせるわけねえんだよ。てめえが今までやってきたこと一つ一つ、何一つてめえの野望には近づいてねえよ。そりゃそうだよな。てめえ自身が野望なんかねえんだからよ。」

銀時は馬鹿にしたような目で高杉を見た。

「うるせえ！黙れ銀時！！」

高杉も反論しようと言えはみたが後に続く言葉が何も出てくることはなかった。

「何も言えねえよな。全部凶星だもんなあ。てめえがしようとしてたことがいかに下らねえかわかったかよ。」

周りがやけに静かだった。建物は炎で燃え、空気は煙でどす黒い。まさに戦場のような状態だったが、この三人を囲む空気は白く無音のような景色だった。

この三人にしか入ることのできない空間、この三人にしか吸えない空気。この三人のためにある世界のようにだった。

・・・だがただ一人、誰ひとり入ることのないこの世界で。この三人がつくる世界に入ることができる、この世界に入っても許される人間がいた。

「お前たち三人は本当にすることが派手だね。」

そう。この三人を巡り合わせた運命の人。

「おせーよ先生。」

銀時は高杉の後方に目をやり、ニヤツと笑いながらそう言った。

「こら。先生に向かって無礼ではないか。お待ちしておりました先生。」

高杉は一瞬何が起きたかわからなかった。

銀時が笑っている。桂も笑っている。

銀時と桂が「先生」と呼んでいる。

まさか。

まさかそんなはずがない。先生はあの日……。

しかし背中越しに聞こえる声はまさにその人の声だった。

高杉は説明のつかない気持ちのままゆっくりと後ろに振り返った。

するとそこには、ずっと心の奥にいた、もう一度会いたいと願っていた人が昔と同じ姿のまま立っていた。

「しっ……松陽先生。」

14・ただ違いたくて（後書き）

ありがとうございました。

物語もそこそこ進んできてますね。

次回も頑張ります。

15・この身に流れる血（前書き）

ちよつと目線をかえて書きました。

ちよつと聞きたいんですが神楽は沖田のことを何と呼んでましたっけ？

わからないんで自分の好きな言葉を使ってます。

15・この身に流れる血

「いいなああつちは。すごく楽しそうだなあ。あの人もずるいなあ。二人も相手して。」

高杉が銀時・桂と戦っている頃、神威も神楽と沖田を相手に戦っていた。

・・・しかし、

力の差は歴然だった。

「ねえもういいよね？君達じゃ俺には勝てないよ。」

沖田と神楽は既にボロボロだった。二人ともろくに攻撃を当てることも出来ず、ただただ防戦一方であった。しかし次第に防御も出来なくなり、体は傷だらけである。直に殺られることは目に見えている状況だった。

「おいおい。おめえの兄貴いったいどーなってんでい？化けもんじやねえかい。」

「だから言ったアル。てめえは引っ込んでろアル。これは私の勝負アルよ。」

「そうは言っても俺がいなきゃおめえもとっくにブチ殺されてるぜい。強がるのはよせい。」

沖田は正直驚いていた。こんなにも力の差がはつきりと出てしまう相手戦った経験がないからである。

剣の腕は確かだが、経験不足。これが真選組唯一にして最大の弱点だった。

「ハハ。馬鹿な妹は置いといてそっちのお前もまだまだだね。センスは抜群だけど今の段階じゃ正直俺の敵じゃないかな。」

「化けもん風情にえらそうに言われたくはないぜい。それにそんなこと言われたぐらいで諦めるぐらいじゃ最初から剣の道には生きてねえんでさあ。」

沖田はそう言って倒れていた体を無理やり起こし、自らを奮い立たせるように剣を構えた。

それを見て神威はまた楽しそうにニコッと笑みを浮かべた。

「やっぱりこの国の侍っていう種族は面白いね。殺しがいいがあるよ。」

「税金泥棒！お前はさっさと逃げるアル！本気で殺されたいアルか！？」

神楽はあちこちから血を流してもなお戦うことをやめない沖田に向

かって叫んだ。

「うるせい黙ってるくそチャイナ。こちとら税金で飯食ってる身でい。たまには市民のために働かねえと食いぶちがなくなっちまう。」

そう言っつて沖田は神威にまた挑んでいった。しかし実力の差と負傷で沖田の攻撃はかすりもしなかった。いくら経験不足といえど沖田は武闘派集団真選組一番隊の長である。実力は申し分ない。ただ相手が強すぎるのである。

「まだまだ力不足だけど暇潰しにはなったかな。でもそろそろ終わりにするよ。」

神威はそう言っつて沖田に神速のごとき斬撃を浴びせた。

「税金泥棒!!」

「やっぱ敵わねえなあ。あとは頼んましたぜい。」

薄い笑みを浮かべ、沖田は誰に言うでもなくそう囁いた。

神楽の叫びもむなしく沖田はゆっくりと倒れていった。頭から胸にかけて血を吹き出しながら。その様子を神楽は呆然と眺めていた。手を差し出そうとするわけでもなく、助けようとするわけでもなく。

「ふう。終わった。いやいや。結構強かったけど俺や旦那に比べたらちよっとね。で、そっちのバカ娘はどうする？まだ戦るの？」

神威は倒れている沖田の方から神楽の方へと視線を向けた。しかし神楽からは何の返事もない。それどころかこちらを見てもいなかった。

何か様子がおかしい。泣いているわけでも怒っているわけでもない。ましてや喜んでるわけでもない。

「どうしたのー？もう終わりー？」

神威はいつもの口調で神楽に問いかけながら、近づきまじまじと妹の顔を見た。その瞬間神威は驚愕し、少し慌てながら間合いをとった。

「・・・殺す。・・・殺す。」

神楽は感情のない不気味な笑いを浮かべながらただひたすら「殺す。」とつぶやいていた。

ずっと神楽の心の奥底に潜んでいた夜兎の血。それが覚醒を迎えた瞬間だった。

「ははは。さすが俺の妹。」

15・この身に流れる血（後書き）

ありがとうございました。

誰かのことを忘れているような気がするんですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4719s/>

銀魂 ~夜叉と陽の物語~

2011年12月11日22時54分発行